

埼玉会館 前川國男 建築セミナー 第11回

わたしたちと生きる建築

2024年9月16日（月・祝）13:30~16:30 埼玉会館 大ホール

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

協力：株式会社前川建築設計事務所 後援：DOCOMOMO Japan

埼玉会館 前川國男 建築セミナー 第11回

埼玉会館 彩発見



わたしたちと
生きる建築

SEMINAR PROGRAM

2024（月）
9/16（祝）
13:30-16:00

埼玉会館 大ホール
入場無料 定員300名
（要事前申込）

埼玉会館ウェブサイト
www.saf.or.jp/saitama

主催（公財）埼玉県芸術文化振興財団
協力（株）前川建築設計事務所

第1部 モダニズム建築への共感と想像力の回復
渡邊 研司（東海大学建築都市学部 教授）

第2部 未来に生きる前川建築
～「農民の家」と呼ばれた庁舎～
片山大輔（岡山県土木部都市局建築営繕課 主幹）

第3部 トーク・わたしたちと生きる建築
橋本功（（株）前川建築設計事務所 代表取締役所長）
渡邊 研司 片山大輔

埼玉会館 前川國男 建築セミナー 第11回

埼玉会館 彩発見

わたしたちと
生きる建築

2024年9月16日（月祝）13:30-16:00
埼玉会館 大ホール
入場無料 定員300名（要事前申込）

登壇者プロフィール

渡邊 研司（わたなべ けんし）
東海大学建築都市学部教授 博士(工学) / AAGrad.
1961年福岡市生まれ。1985年日本大学理工学部建築学科卒業。1987年日本大学大学院理工学研究科修士課程修了。1987年から93年、声韻建築設計研究所で設計に従事。1993年、イギリス近代建築運動についての研究を行う。1999年東京大学にて設計(工学) 授与。2000年から2004年、建築史研究家として設計に従事。2005年から2010年、東海大学工学部建築学科准教授。2011年から2022年、同教授。2022年から現在まで、同大学建築都市学部教授。1999年から現在まで DOCOMOMO Japanにて活動。2018年から2023年までDOCOMOMO Japan代表理事。

片山 大輔（かたやま だいすけ）
岡山県土木部都市局建築営繕課 主幹
平成17年度(2005年度)、岡山県入庁。令和3年度(2021年度)、総務部財産活用課で県庁舎新築工事に従事。令和4年度(2022年度)から令和5年度(2023年度)まで、土木部建築指導課で建築魅力発信業務に従事し、県庁舎耐震化工事の完成に合わせてガイドブック作成、展示コーナー計画、県庁舎見学ツアー企画のほか、岡山県庁舎の登録有形文化財の登録手続きを推進。令和6年度(2024年度)現在、土木部建築指導課で県有施設長寿命化改修工事等に従事しながら、県庁舎見学ツアーガイドを担うなど、前川建築への深い情熱を抱く。

橋本 功（はしもと ときお）
株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長
1945年神奈川県生まれ。1970年日本大学理工学部建築学科卒業後（株）前川建築設計事務所入所。1994年（株）前川建築設計事務所取締役。2020年代表取締役就任。現在に至る。担当した主な作品は、福岡市美術館（1979）、埼玉県立自然史博物館（1981）現・埼玉県立自然史博物館・国立音楽大学講堂（1983）国立音楽大学付属幼稚園（1984）付属中・高等学校増築（1995）付属小学校（2008）千葉県東総文化会館（1991）埼玉県見玉町総合文化会館（1995）、など。この間、弘前市から熊本県までの、使われている全国の前川建築の保全改修や前川建築に関する様々な活動に精力的に参画している。

申込期間 8月1日（木）から ※定員に達した時点で締め切らせていただきます。

申込方法 下記①～⑥を明記のうえ、メール・申込みフォームいずれかの方法でお申込みください。
①氏名（漢字） ②氏名（フリガナ） ③電話番号 ④郵便番号 ⑤住所 ⑥メールアドレス ⑦人数 ⑧同行者氏名

申込先 「埼玉会館・彩発見」担当 小澤・新井 宛
【メール】 info-kaikan@saf.or.jp
【申込みフォーム】 QRコードをご利用ください。

問合せ 「埼玉会館・彩発見」担当 小澤・新井
TEL: 048-829-2471（休館日を除く10時～19時）

埼玉会館のご案内
〒330-8518 さいたま市浦和区高砂3-1-4
JR浦和駅（西口）より徒歩6分



駐車場（有料）は台数に限りがございますので、ご来場の際はなるべく公共交通機関をご利用ください。

－ 記 録 目 次 －

第1部 モダニズム建築への共感と想像力の回復

（渡邊 研司）

埼玉会館との関わり・・・・・・・・・・3

モダニズム建築保存にある「ねじれ」・・・・・・・・・・4

新しい価値観で生まれたモダニズム建築の、次の新たな価値観の時代における運命は
・・・・・・・・・・5

共感と想像力とは ～19世紀のイギリスにヒントがある～・・・・・・・・・・7

ジョン・ラスキンの格言27：建築は、未来にそれを使う人のためのもの・・・・・・・・・・8

ラスキンの格言31：建築は日頃から気遣いを怠らず、大事に使うこと・・・・・・・・・・8

共感と想像力による愛を持って、600年以上壊れることのない建築を造れ・・・・・・・・・・9

DOCOMOMO（ドコモモ）という運動体・・・・・・・・・・	10
廃墟化していた1990年代のサヴォア邸とゾンネストラールのサナトリウム・・・・・・・・・・	10
日本のモダニズム建築保存のきっかけ・・・・・・・・・・	11
DOCOMOMO Japanによる活動の五つの骨子・・・・・・・・・・	11
リビング・ヘリテージ：生きていく遺産・・・・・・・・・・	14
ニューロサイエンスと建築が結びついた研究が盛んな欧米・・・・・・・・・・	14
共感と想像力の回復と創造・・・・・・・・・・	16
「わたしたちと生きる建築」を考える原点はラスキン「真実の燈」に・・・・・・・・・・	17

第2部 未来に生きる前川建築 ～「県民の家」と呼ばれた庁舎～

(片山 大輔)

前川建築・岡山県庁舎との関わり・・・・・・・・・・	19
岡山県の取組み（建築編）～建築指導課と建築営繕課の仕事～・・・・・・・・・・	20
岡山県の前川建築、工業化・軽量化の時代の県庁舎・・・・・・・・・・	21
コンクリート打放しの時代に天神山文化プラザ・・・・・・・・・・	21
打ち込みタイルの先駆け、林原美術館・・・・・・・・・・	22
岡山県庁舎 魅力発信（きっかけ編）～魅力発信業務の方向性を描く～・・・・・・・・・・	22
岡山県庁舎（建設編）・・・・・・・・・・	24
岡山産業文化博覧会からスタートした新庁舎「県民の家」は三木行治知事の思いが ・・・・・・・・・・	25
岡山県庁舎 魅力発信（見どころ編）・・・・・・・・・・	27
岡山県庁舎 魅力発信（奮闘編）・・・・・・・・・・	29
学生と作ったパンフレット・・・・・・・・・・	30
満足度120%の見学ツアー・・・・・・・・・・	31
登録有形文化財にして観光資源化・・・・・・・・・・	32
わたしたちと生きる建築（まとめ） ～将来を見据えたマスタープラン作成や専門委員会の設置を～・・・・・・・・・・	32
記憶と記録に残る建物を・・・・・・・・・・	33

第3部 トーク・わたしたちと生きる建築

(橋本 功)

埼玉会館 前川國男 建築セミナーを振り返る・・・・・・・・・・	35
地域や街の歴史や記憶に育まれたコミュニティが大事にされない危機感・・・・・・・・・・	36
前川建築は、生活者の視点から造られた建築・・・・・・・・・・	37
(橋本 功、渡邊 研司、片山 大輔、会場参加者)	
居心地の良いこと、使い続けて記憶を繋ぐことの大事さ・・・・・・・・・・	37
施主の思いが建築にどう生きるか・・・・・・・・・・	38
古い県庁舎を現在の環境基準に合わせて残す工夫は・・・・・・・・・・	39
閉塞感漂う浦和の街の変貌ぶりと「魅力的な街づくり」を考える・・・・・・・・・・	39
建築や街並みを愛して研究してアピールに熱心なのは岡山県だけじゃない・・・・・・・・・・	41
住宅にも宿る、積み重ねてきた生活の記憶と時間・・・・・・・・・・	41
市民の活動で存続の危機を脱した宮城県立美術館・・・・・・・・・・	43

(全43ページ)

第1部 モダニズム建築への共感と想像力の回復

小澤（司会・進行）：こんにちは。本日は、埼玉会館前川國男建築セミナー第11回「わたしたちと生きる建築」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。これまでのセミナーでは、埼玉会館の建築的な魅力や前川國男の人間的な魅力を通じて、埼玉会館の魅力や価値といったものを様々なテーマを通してお伝えしてまいりました。今回はそこから一步踏み込んで、「わたしたちと生きる建築」と題し、建築を未来に継承していくことなどについて、参加者の皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

それでは第一部、お話しいただくのは東海大学建築都市学部教授の渡邊研司先生です。

渡邊 研司（わたなべ けんじ） 東海大学建築都市学部教授 博士(工学) AAGraDip.

1961年福岡市生まれ。1985年日本大学理工学部建築学科卒業。1987年日本大学大学院理工学研究科修士課程修了。1987年から93年、芦原建築設計研究所で設計に従事。1993年から98年、ロンドンAAスクール大学院歴史理論コースに留学、イギリス近代建築運動についての研究を行う。1999年、東京大学にて博士（工学）授与。2000年から2004年、連健夫建築研究室にて設計に従事。2005年から2010年、東海大学工学部建築学科准教授。2011年から2022年、同教授。2022年から現在まで、同大学建築都市学部教授。1999年から現在まで、DOCOMOMO Japanにて活動。2018年から2023年までDOCOMOMO Japan代表理事。

埼玉会館との関わり

渡邊：渡邊でございます。私は、東海大学で建築の教育と研究に従事しています。2023年、昨年までDOCOMOMO Japan（ドコモモ・ジャパン）という組織の代表を務めさせていただきました。

今日はこの「わたしたちと生きる建築」を受けて、「モダニズム建築への共感と想像力の回復」というタイトルで、赤字で示している「生きる」ということを「共感と想像力」という形で話をしてみたいと思っています。

この写真は、実は埼玉会館じゃなくて山梨文化会館ですけど、これは公的な建物じゃなくて山梨の放送のメディアセンターなんです。なんでこれを出しているかというと、この埼玉会館と同じ年を重ねている、前川國男の弟子で丹下健三の作品ということで、ちょっと出してみました。



この埼玉会館に関する話をするのは、実は今回が3回目でございます。1回目はエスプラナードを使って現代アートを展示したエスプラナード展のトーク・イベントで、1950年代のイギリスの話をしました。2回目は

この埼玉会館が、「DOCOMOMO Japanによる日本におけるモダンムーブメントの建築216選」で選定建築物となった2018年に、講演をさせていただきました。下の写真3枚は2022年にDOCOMOMO Japanの総会をこの地で行い、その時に橋本さんにも来ていただいて見学をしたもので、このような形で埼玉会館に関わってきました。

本当は実は2005年に、松隈洋さんが企画した「生誕100年前川國男建築展」で、埼玉会館の模型を東海大学で作ったのが一番最初のつながりです。

モダニズム建築保存にある「ねじれ」

お手元の配布資料に、今日の話のもとになった論考、記事があります。内容的にはこれに基づきながら、話をしたいと思っています。

皆さんも多分、モダニズム建築が近年壊されているというような実態にお気づきかもしれません。むろん、埼玉会館みたいに大切に使い続けられる建築もあるわけですけど、かなり多くの近代建築、戦後の建築が壊されている。一方で例えば、ル・

コルビュジエの作品は世界遺産になっていくというようなことがあって、どうやらなんか、ここにちょっと気持ち悪い「ねじれ」みたいなのを私は感じているんですね。

もともと「モダン」というのは「近代」という意味を持っていて、時代的な枠組みでいうと、おそらく1850年から1970年ぐらいで、20世紀と言ってもいいと思うんですけど、それまでとは異なる新しい考え方、材料、技術、工法で建てられた建築や都市環境だと思うんですね。もっと言うと、象徴性だったり、装飾性、そういうものから機能的、経済的な視点で建てられた建築群なんです。



今までの埼玉会館に関するイベントとの関わり



2022年3月20日DOCOMOMO Japan総会+見学会

講演内容

1.はじめに：モダニズム建築保存にあるねじれ

モダニズム建築の世界遺産化と解体、モダニズム建築の光と影、モダニズム建築のジレンマ

2. 共感と想像力とは

19世紀イギリスから学ぶこと、ジョン・ラスキンの教え、修復とは破壊の最悪の方法か？

3. DOCOMOMOという運動体

DOCOMOMOの設立と活動、二つの廃墟モダニズム建築、モダニズム建築保存への新たな方向

4. 建築を愛することとは 異なる領域からの視点

生命体への想像力と共感、ニューロアーキテクチャの可能性、建築を身体化すること

5. おわりに：共感と想像力の回復と創造

わたしたちがモダニズム建築と生きるには、コンドルの教え

1.はじめに：モダニズム建築保存にあるねじれ

Modern=近代という時代 1850年から1970年代 20世紀という捉え方

19世紀までとは異なる**新しい**考え方（思想）、技術、材料、構法で建てられた建築や都市環境

歴史的な要素=象徴性・装飾性の視点（芸術）から 機能的（使いやすさ）・経済的な視点（科学）で建てられた非装飾の建築や都市環境

モダニズム建築の光と影

光としての世界遺産化（象徴性・歴史記念性）

ル・コルビュジェ（国立西洋美術館）

フランク・ロイド・ライト（日本未登録）

丹下健三（代々木体育館）2027年

影としての解体（経済性・脆弱性・非機能性）

1960年代以降のモダニズム建築

DOCOMOMO Japan280選定建築物

解体された数は？



一方、例えばこれを世界遺産にするということになると、ある意味、象徴性だったり記念性というものが必要になってくる。ご存知のように、ル・コルビュジェの国立西洋美術館。あとはフランク・ロイド・ライト(*1)。これは残念ながら日本はその登録に入ってなくて、これからそれを入れようという動きもあります。そして、丹下健三の代々木体育館。これはすでに動いていて、2020年代あるいは2030年代に、おそらく世界遺産になるだろうと。

一方、僕は「影としての解体」と言ってるんですけど、経済性あるいは脆弱性、非機能性で、時代に合わなくなったという形で1960年代以降のモダニズム建築が壊されている。DOCOMOMO Japanでは、今まで280の選定建築物があります。この中で解体された数をご存知ですか？実は、30ぐらいあります。つまり、10%強。それぐらいが、すでに解体されているということです。

新しい価値観で生まれたモダニズム建築の、次の新たな価値観の時代における運命は

 旧埼玉会館配置図	 旧埼玉会館全景	 現 埼玉会館全景	 現 埼玉会館平面図
旧埼玉会館 御成婚記念埼玉会館 1926年 岡田信一郎設計 公会堂建築（音響性能、構造、設備）革新性 建築意匠 アールデコ 近代建築史上 岡田の作品としても知られていない。		現埼玉会館 1966年 前川國男設計 2017年 DOCOMOMO Japan選定建築物指定 テクニカルアプローチ、打ち込みタイル工法 エスプラナード 外部空間 50年代前川作品と70年代美術館・博物館建築とをつなぐ位置付け	

そうやってモダニズム建築が新しくなるのは、ある意味、運命的なことなんです。実はこの埼玉会館自体も、前川さんが1966年にこの埼玉会館を建設したんですが、1926年に岡田信一郎が旧埼玉会館「御成婚記念埼玉会館」というのを設計しました。よく見るとスタイルは違うんですけど、ちょっと配置的には似てる部分もあるなと思って

いるんです。この旧埼玉会館は公会堂建築としては重要で、音響性能だったり、構造、設備、これが非常に革新的なものだったんですね。いわゆる建築意匠はアールデコと言われているスタイルです。この岡田信一郎・前川國男のコンビは、東京都美術館もそうですね。昔の東京府立美術館は岡田信一郎で、今の東京都美術館は前川國男。こうして、モダニズム建築は新しくなるという、ある種の宿命を持っている。

(*1)フランク・ロイド・ライト：アメリカの建築家。ル・コルビュジェ、ミース・ファン・デル・ローエと並ぶ近代建築の三大巨匠。2019年、アメリカ合衆国の8つの建築作品が世界文化遺産に登録。日本にも自由学園明日館ほか4つの建築作品がある。

解体され空地となった旧都城市民会館



解体工事が始まった旧羽島市庁舎



それで「影としての解体」ということで言うと、実は都城市民会館は解体されて、今は広い空き地になっているんですね。下の写真は、解体工事が始まった旧羽島市庁舎。これも解体した後に、駐車場になるという非常に悲しい状況にあるわけです。

おそらくここには、「モダニズム建築保存のねじれ」というかジ

レンマがあって、実はモダニズム建築は歴史的建築のような記念性や象徴性を有する装飾をなくすことに存在意義を見出しているんですけど、世界遺産という話で言うと、そのための保存や再活用を進めるためには、ある種、目に見える形で記念性や象徴性を作り出さなくてはならない。あるいは都市と地方とのギャップで、過疎化に伴う人口減少や産業構造の変化、地方創生という甘いささやきがあって、その結果、駐車場になっているという非常に悲しい現実があるんですね。

おそらくここには物理的要因と概念的な理由があって、新しい世界を作り出そうとしたモダニズム建築が、半世紀ほど時間が経過するにつれ、機能性や耐震性、設備・機器の更新、ある種の劣化などで物理的性能に 대응することができなくなった。これが物理的理由ですが、これに関しては、ある種、対応ができていて、免震化だったりコンクリートの中性化、あるいは開口部、あるいは防水の処置の発展などによって回答を与えることができる。

ただ重要なのは、この常に新しさを求めるモダニズム建築自体が、時間を経ることで歴史的な存在として見なされてしまう、ある種の自己矛盾やジレンマを抱えてしまう。この概念的な理由の対応というのは、「モダニズム建築保存とは何か」「何のために保存する

モダニズム建築保存のねじれ＝ジレンマ

歴史的建築のような記念性や象徴性を有する装飾をなくすことにその存在意義を見出していたモダニズム建築が、その保存や再活用を進めるためには、目に見える形で記念性や象徴性を作り出さなくてはならないこと

都市と地方とのギャップ 過疎化に伴う人口減少や産業構造の変化、地方創生という甘いささやき 結果駐車場、空き地となる

新しい世界を作り出そうとしたモダニズム建築が、半世紀ほど時間が経過するにつれ、機能性や耐震性、設備機器の更新、RCの劣化などの物理的性能に 대응することができなくなったこと

物理的理由

常に新しさを求めるモダニズム建築自体が、時間を経ることで歴史的な存在として見なされてしまうという自己矛盾（ジレンマ）を抱えてしまったこと

概念的理由

物理的理由への対応：免震化、コンクリート中性化に対する新たな指針、開口部・防水処置の発展、AIによる分析

概念的な理由への対応：モダニズム建築の保存とは何か、何のために保存するのか、目に見えない哲学的、文化的な人間としての問い

AI社会における**人間の身体や心の在り方**

モダニズム建築社会の変容

19世紀から20世紀 身体から機械へ

20世紀から21世紀 機械から情報へ



のか」、目に見えない哲学的な、思想的な、文化的な、人間としての問い、ちょっと大げさに言うとそういうものがあるんだろうと。

実はこれが、これからAI社会になると、建築家の職能も多分変わっていくだろうという気がするんですけど。おそらくこれが人間の身体や心のあり方に非常に重要な問いかけをしているんじゃないかと。ざっくり言うと、多分、

モダニズム建築社会が変容していく。つまり、19世紀から20世紀に変わる時は、「身体から機械へ」変わっていったわけです。20世紀から21世紀は、「機械から情報へ」というような移り変わりがある。

共感と想像力とは ～19世紀のイギリスにヒントがある～

そこで僕はちょっと、英語でエンパシー（Empathy）と言われています「共感」ということに注目したいなと思って。想像力はイマジネーション（imagination）です。これが非常に盛んに議論されたのが、19世紀のイギリスで、当時のイギリスはかなり先を進んでいた。だからこそ日本は、先生としてイギリスから

ジョサイア・コンドル(*2)を呼んできたりして、イギリスのやっていることを我々は学んだわけです。これは建築だけじゃないと思います。

だけど実は、イギリスでは繁栄と衰退が同時に起こっていたということがあって、ここにある種、今を考えるヒントがあるんじゃないかと僕は思っているんです。繁栄はあるにもかかわらず、一方ではスラム街が建設されてたりするわけですね。公害的な問題、環境的な問題。そういうのも、実は19世紀に起こっている。そこには理由があって、イギリスはいち早く産業革命を達成し、社会の価値観が「手作りから機械化へ」変化していく。古い価値観が失われ、新しい価値観が現れることに対する不安を、多分イギリス人も持っていたはずなんです。

これがおそらく我々で言うと、COVID-19および2045年のシンギュラリティ(*3)を受けて、本当にAI社会に向かっていくことがいいのかどうかというような不安？多分、そこら辺は共有してるんじゃないかなと思っています。

ふたつ目は、多くの歴史的建築物が時代に合わないものとして、19世紀のイギリスにおいても破壊されて、あるいは「修復」の名のもとに表面が剥ぎ取られていく様子。これは多分、「建築とは何か」あるいは「建築はいかにあるべきか」という問いがそこに含まれているんですね。社会的価値観の変化に対する建築家の職のあり方や建築教育への問い、社会が変わるときに建築家は何を学び、何を行わなければならないのか。

2. 共感と想像力とは

19世紀イギリスに注目する理由

繁栄と衰退が同時に起こったこと、近代日本のお手本

1. イギリスがいち早く産業革命を達成し、社会の価値観が手作りから機械化へ変化し、古い価値観が失われ、新しい価値観が現れることに対する不安。COVID-19および2045年シンギュラリティを受け入れ、AI社会に向かうことへの不安
2. 多くの歴史的建築物が時代に合わないものとして破壊され、修復の名の下に表面が剥ぎ取られていく様子、建築とは何か、建築はいかにあるべきかという問い
3. 社会的価値観の変化に対する建築家の職能の在り方と建築教育への問い。社会が変わるときに建築家は何を学び、何を行わなければならないのか。



ドイツ製に造り出されるイギリス製。1895年「パンチ」



1895



1895

(*2)ジョサイア・コンドル：1852年ロンドンに生まれ、ロンドン大学で建築を学ぶ。25歳で英国王立建築家協会のソーン賞を受賞。その後、工部大学校（現東京大学）教授として招かれ、日本人建築家を育て、西洋建築の設計にも携わった。
(*3)シンギュラリティ：科学技術の進展に対して、特別な変化を示す点として「技術的特異点」。近年は、人工知能の進化の側面で使われることが多く、人工知能が賢くなり、人間の脳と同レベルになるタイミングのこと。

出典：野村総合研究所 <https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/1st/sa/singularity>より

昔、内藤廣(*4)さんの講演を聞いた時に、彼は面白いことを言ってたんですよ。「百年先を考えるには百年前を考えた方がいい。」これ、ちょっと面白いなと思って。おそらく19世紀の、百年前のイギリス辺りに、実は百年後を考えるヒントがあるんじゃないかと思っています。

ジョン・ラスキンの格言27：建築は、未来にそれを使う人のためのもの

具体的に言うと、僕はラスキン(John Ruskin)にちょっと注目しているんです。「建築の七燈」という1849年に出した本の第6章に「記憶の燈」というのがあって、そこで格言27として、「建築は歴史の伝承になるものとして造らなければならない。過去の時代の建築を、私たち祖先からの遺産の中の最も貴重なものとして残さなければならない」と、彼は言っているんです。

おそらくこれは、モダニズム建築を含めて古今東西の建築を保存する際に、それらが時代の記憶を語り、あるいは人類共通の遺産として本来に継承すべきであると。これは多分、世界文化遺産のある種の価値観なわけです。そこで過去の建築、現在の建築が一体誰のためにあるのか、誰のものであるかをも問いかけている。ラスキンはすごいことを言ってるんですよ。それらは決して私たちのものではないんだと。過去に造った人のものであると訴えている。つまり、それを勝手に修復したり改変したりする権利は、私たちにはないと、当時、言ってるんですね。

ラスキンの格言31：建築は日頃から気遣いを怠らず、大事に使うこと

格言31では「いわゆる修復とは破壊の最悪の方法である。」え？っていう感じはするんですけど、「修復は始めから終わりまで一箇の『嘘』」だと言ってるんですね。その後に、「適当な時機に数葉の鉛板を持って屋根を修理し、適当な時機に若干の枯葉や枯枝を水路から取り除いたなら、屋根も壁も朽廃から救われるのであろう。古い建物はよくよく注意して大切にせよ。諸君の最善を尽くし、いかなる値を持ってしてもあらゆる破損の力よりそれを保護せよ。その弛める処は鉄をもって結束せよ。その傾ける処は木をもって支えよ。補助物の不体裁のごときは気にせぬが良い。失った手足より鹿杖(かせづえ)の方が優しである。愛情を込めて、尊敬の念をもって絶えず続けて、これをやるがよい」と。

ラスキン、建築の七燈(1849) 第6章 記憶の燈

格言27 「**建築は歴史の伝承になるものとして造らなければならない。過去の時代の建築を私たち祖先からの遺産の中の最も貴重なものとして残さなければならない**」

モダニズム建築を含めて古今東西の建築を保存する際に、それらが時代の記憶を語り、あるいは人類共通の遺産として、本来に継承すべきである→世界文化遺産の価値観
過去の建築、現在の建築が一体誰のためにあるのか、誰のものであるのかを問いかける。
それらは決して私たちのものでもなく、過去に作った人のものであり、未来にそれを使う人たちのためのものであると訴える。それらを勝手に修復したり、改変したりする権利が私たちにはない

格言31 「**いわゆる修復とは破壊の最悪の方法である。修復は始めから終わりまで一箇の『嘘』である**・・・適当な時機に数葉の鉛板を持って屋根を修理し、適当な時機に若干の枯葉や枯枝を水路から取り除いたなら、屋根も壁も朽廃から救われるのであろう。**古い建物はよくよく注意して大切にせよ、諸君の最善を尽くし、いかなる値を持ってしてもあらゆる破損の力よりそれを保護せよ**。・・・その弛める処は鉄をもって結束せよ。その傾ける処は木をもって支えよ、補助物の不体裁のごときは気にせぬが良い。失った手足より鹿杖(かせづえ)の方が優しである。**愛情を込めて、尊敬の念をもって絶えず続けて、これをやるがよい**・・・」

当時の修復とは、古い建築物の表面を削り取って、新たな様式や装飾を付加すること。

日頃から建築に対して気遣いを怠らず、古くなったところは修繕しながらリスペクトし、大事に使うこと。

日常のメンテナンスの必要性と適応的保存改修の容認。



(*4)内藤廣：日本を代表する建築家のひとり。内藤廣建築設計事務所 <http://naitoaa.co.jp/090701/profile/top.html>

当時の修復という概念は、古い建築物の表面を削り取って何か新たな様式を装飾すること、付加することだったんですね。それで「そうじゃないよ」と言ってるんです。多分、これは耳の痛い話で、日頃から建築に対して気遣いを怠らず、古くなったところは修繕しながらリスペクトして大事に使っていけと。つまり、日常のメンテナンスの必要性和、適用的保存改修の容認ということだと思います。

共感と想像力による愛を持って、600年以上壊れることのない建築を造れ

ラスキン「建築における**想像力**の効果」 講演会 AA 建築協会 1857年1月23日

「こうして諸君の手になった物がいかに長く世に伝わり、いかに多くの人に仰ぎ見られるかを考えたならば、諸君はいかにその業が大切であるのか、その責任が重大であるかを顧慮しなければなるまい・・・諸君の意を用いて建てた建物は500年から600年以上決して壊れることのないところにある・・・もし諸君の共感が欠乏し、不健全な空想が精力をたくましくし、軽浮の調子を多く帯び、不忠実な研究ぶりのみであったならば、その影響は人の心より伝わり、諸君の世を去った後も非常に長い間、非常に多くの人を損なうのである」

50～60年で壊れてしまうような建築を建ててはいけない。命をかけて仕事に取り組むことの大切さ。

「諸君がそのこと（建築の設計）にあたる際には、いつも自ら進んで、その作品をなすのに悦びを感じるようでなければならない。そうでなければこの作品によって人を悦ばすことができるはずはない。私の最も高尚な動機というのはすなわち愛である。諸君の選んだ道に対する愛、諸君の住む世界に対する愛、諸君の交わる人に対する愛、この三方面的愛がなければならない」

この「愛」とは**共感と想像力**に支えられた感情であり、建築という職業（労働）に対する愛、生活する人間への愛、建築を共に実現する建築家（同僚や後輩）や構造、設備、施工を行う人たち、画家や彫刻家など芸術家への愛。

「**建築を愛する心**」の重要性。

建築家にとって大切なことは、金儲けに走ったり、自己顕示欲から他人を妬んだりする利己主義的な姿勢を第一とするのではなく、**深い歴史観に基づいた社会や公共的福祉の立場を優先する利他主義的姿勢**。



もうひとつ、ラスキンは「想像力」の話をしているんですね。1957年1月23日、アーキテクチュラル・アソシエーション（Architectural Association）という建築家を目指すための若い職工の学校で、講演会をしています。そこで、「こうして諸君の手になった物がいかに長く世に伝わり、いかに多くの人に仰ぎ見られるかを考えたならば、諸君はいかにその業が大切である

のか、その責任が重大であるかを顧慮しなければなるまい」「建物は500年から600年以上決して壊れることのないところにある」と。50～60年ぐらいで壊れるような建築を建ててはいけない。あんたたち、命をかけて仕事に取り組むことが大切だよと、彼は言ってるんですよ。

「諸君がそのこと（建築の設計）にあたる際には、いつも自ら進んで、その作品をなすのに悦びを感じようでなければならない。」そのためには、「諸君の選んだ道に対する愛、諸君の住む世界に対する愛、諸君の交わる人に対する愛、この三方面的愛がなければならない。」この「愛」というのは多分、その共感と想像力に支えられた我々の感情であって、建築という職業、労働に対する愛、生活する人間への愛、建築を共に実現する建築家や同僚や後輩、構造、設備、施工を行う人たち、画家や彫刻家など芸術家への愛。

ここでやっぱりラスキンが強調しているのは、建築を愛する心の重要性だということですよ。建築家にとって大切なのは、金儲けに走ったり、自己顕示欲から他人を妬んだりする利己主義的な姿勢を第一とするのではなく、深い歴史観に基づいた社会や公共的福祉の立場を優先する利他主義的姿勢だと。なんだか、今の建築界を言ってるように思えるのは、僕だけでしょうか？おそらく「共感」と「想像力」によって生み出される利他的博愛主義的姿勢というのは、モダニズム建築の保存に内包するねじれを元に戻すために必要なことであり、なぜモダニズム建築を保存するのかという問いへの答えも、実はそこにあるんだと思います。

DOCOMOMO（ドコモモ）という運動体

僕は、DOCOMOMOという運動体があることをイギリスにいた時に初めて知って、1996年からこの組織にちょっと関わったんですね。それまで、あまり「保存」には興味はなかったんですけど、こういう組織に関わるとこれはやっぱりすごく大切なことかなと思ったんですね。

DOCOMOMOは、1988年にオランダのアイントホーヘンというところで設立されました。おそらく、欧米諸国のモダニズム建築が老朽化して使われなくなったことで、壊される、廃墟となっている状態に対する危機感が共有されたわけですね。これは多分、20世紀の建築文化の喪失だと思うんです。

モダニズム建築が有するジレンマ、既存の古めかしい規則や様式や趣味嗜好を反映した建築に対する反抗という性質を、それ自体が持っていて。ただし、やっぱり20年代30年代にできた建物は、構造方式や材料などの使用がある種、実験段階だったんですね。だから、どうしてもそれは朽ち果てていくということなんです。

この右側の写真は、1996年のスロバキア大会で、ここからDOCOMOMOとの関わりが始まった。

3.DOCOMOMOという運動体

Documentation and **C**onservation of buildings, sites and neighborhoods of the **M**odern **M**ovement モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の調査記録及び保存

1988年オランダ・アイントホーヘンで設立

欧米諸国のモダニズム建築が、老朽化や使われなくなったことから壊され、廃墟となっている状態に対する危機感（20世紀建築文化の喪失）

モダニズム建築が有するジレンマ 既存の古めかしい規則・様式や趣味趣向を反映した建築に対する反抗という性質

構造方式や材料などの使用が実験段階であったこと

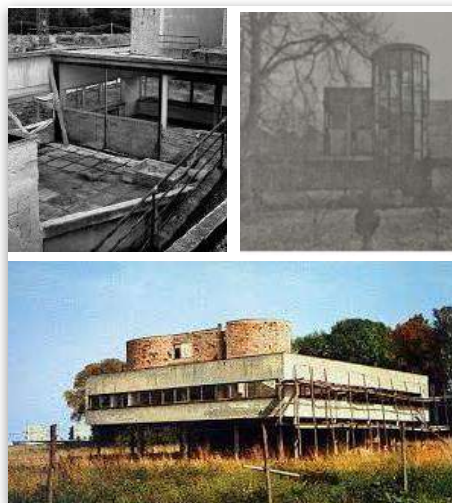


1996年9月 第4回DOCOMOMO
国際会議スロバキア
参加者全体写真

廃墟化していた1990年代のサヴォア邸とゾンネストラールのサナトリウム

実は1990年代のサヴォア邸は、こんな状態だったんですね。コルビュジエ自身がやっぱり記憶とともにサヴォア邸自体を残したいと、多分「共感」があって、これがコルビュジエ財団の設立になって、ゆくゆくは世界文化遺産化につながっていく。

上の右の写真、ゾンネストラール（Zonnestraal）のサナトリウムは、ヨハネス・ダウカーというオランダ人の建築家が設計したんですけど、これも廃墟の状態だったんです。結核自体がなくなったので、使われなくなったということですね。



二つのモダニズム建築の廃墟化

サヴォア邸（ル・コルビュジエ）

コルビュジエ自身記憶とともに残したいという思い（共感） **コルビュジエ財団の設立**

→ **世界文化遺産化へ**

ゾンネストラール・サナトリウム（ダウカー）

アイントホーヘン工科大学教授ヘンケットとヨンゲによるモダニズム建築に対する誇りとリスクベクト（共感）と新たな使い方（想像力）

→ **DOCOMOMO設立へ**

20世紀の文化としてのモダニズム建築の存続への危機意識とそれらに対する深い共感と想像力

「近代」という時代の思想や社会に基づいた価値観を考え直す現象＝ポストモダンの一つ

おそらく、このふたつのモダニズム建築の廃墟化というのがすごく重要で、ここに対して、アイントホーヘン工科大学の教授、ヘンケット（Hubert-Jan Henket）さんとヨンゲ（Wessel de Jonge）さんのふたりが、モダニズム建築に対する誇りとリスペクト、それと想像力により新たな使い方を生み出し、これらの再生がDOCOMOMOの設立に関わっていた。つまり、20世紀の文化としてのモダニズム建築の存続への危機意識と、それらに対する深い共感と想像力があったんだということです。

日本のモダニズム建築保存のきっかけ

一方、1990年代の日本におけるモダニズム建築の状況はというと、同潤会アパートとかモダニズム建築の危機と解体があった。神奈川県立図書館音楽堂も1990年代に本当に壊される一手手前まで行ったんですが、これはJIA（公益社団法人日本建築家協会）の建築家による保存運動があって、その後に、音楽堂による見学会、セミナーが開催されて松隈先生が非常に尽力されて、2018年、前川建築設計事務所によって保存修復、改修され、今も生き生き使われています。

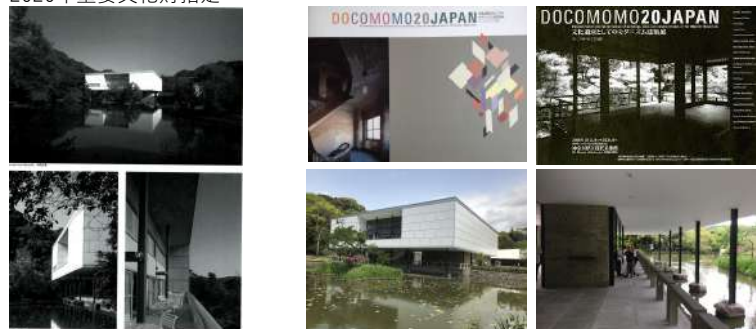
1990年代の日本におけるモダニズム建築の状況
同潤会アパートなどモダニズム建築の危機と解体



神奈川県立図書館・音楽堂（1954）に対するJIAによる保存運動
音楽堂による見学会・セミナーの開催、前川建築設計事務所による保存・修復・改修



神奈川県立近代美術館（1951）
2000年DOCOMOMO20Japan文化遺産としてのモダニズム建築展開催
DOCOMOMO Japanの設立（2000年9月）近美100年の会の設立
鎌倉鶴岡ミュージアム（2019）保存・改修
2020年重要文化財指定



また、1951年に坂倉準三が造った神奈川県立近代美術館。2000年の

「DOCOMOMO 20 Japan文化遺産としてのモダニズム建築展」をここで開催し、そこでDOCOMOMO Japanの設立が2000年9月に正式に決まります。その後、「神奈川県立近代美術館100年の会」も設立され、今はご存じのように、鎌倉鶴岡ミュージアムとして、保存改修され、2020年に重要文化財にも指定されています。

DOCOMOMO Japanの設立と同時に、
このように日本における建築物も保存に大きく舵が切られます。

DOCOMOMO Japanによる活動の五つの骨子

DOCOMOMOの憲章は、最初1990年にアイントホーヘンで採択され、2014年のソウル大会で更新されて「アイントホーヘン・ソウル宣言」という形で出ます。これを受けてDOCOMOMO Japanによる活動の骨子というのを五つあげました。

ひとつは、ウォッチドッグ（watchdog）という登録調査していく、ドキュメンテーションということです。もうひとつは、モダニズム建築の解体が発表された際に、保存の要望書を出していく。3番目は、啓蒙的な活動としてレクチャーやシンポジウム、見学会をやっていく。4番目は、いろんな専門家、行政や施工技術者という人たちと一緒に総合的に保存とか再活用について研究調査を進めていく。最後は、若い世代に伝えていくという教育的なことです。

DOCOMOMO 憲章（アイントハーヘン・ソウル宣言）

ドコモモの主たる到達点は、1990年の設立大会で採択されたアイントハーヘン宣言に述べられている。それは、2014年のソウル大会において更新され、アイントハーヘン・ソウル宣言として承認された。

ドコモモ本部は、非営利組織であり、モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査及び保存に寄与するものである。

その目的は以下のとおりである。

1. モダン・ムーブメントの建築に関する重要性を、一般市民、行政当局、専門家、教育機関に広めること。
2. モダン・ムーブメントの建築作品の調査を進め、学術的価値を位置づけること。
3. モダン・ムーブメントの建築、環境群の保存とリユース（再利用）を推進すること。
4. モダン・ムーブメントの貴重な建築作品の破壊と毀損に反対すること。
5. 保存とリユース（再利用）に対する適正な技術や手段の開発と専門知識の伝達を行うこと。
6. 保存とリユース（再利用）の調査のための基金の調達を図ること。
7. モダン・ムーブメントという過去の挑戦に基づいて形成された建築環境を、将来に継承すべく持続可能なものとして探求しながら、新しいアイデアを展開していくこと。

DOCOMOMO Japanによる活動の骨子

1. 国内にあるモダニズム建築のリストアップを行い、その中から毎年10件程度を選定建築物として、建築物の歴史的、社会的、技術的、地域的価値を調査し、公表すること。調査と公表は、建物がいざ解体されようとする時に、それらを保存し、再活用する上での重要な学術的根拠となる。
2. モダニズム建築の解体等が発表された際、保存の要望書や意見書を作成し、再活用の指針などを提言すること。
3. 一般に対するモダニズム建築の重要性をレクチャー、シンポジウム、見学会などの開催並びに国際的な交流を実施しながら、その価値を広く伝えること。
4. 建築や都市計画における専門家、行政、施工技術者、社会学者などの広い領域の中で、総合的に保存、再活用についての研究、調査を進めること。
5. 上記の活動を若い世代に伝え、大学、専門学校などの専門教育機関での教育プログラムの設置はもとより、小中学校・高等学校における環境教育としての位置付けを行うこと。

1.国内のモダニズム建築の選定・登録・評価書の作成



これは、DOCOMOMO Japanで毎年やってる選定建築物の検討の様子です。COVID-19以降、今はZOOMでやってます。ZOOMだと地方からも参加できるので、それはそれでいいんですけど、写真のように喧々諤々やるのも、なかなか面白い経験でした。それで、この右にあるようにDOCOMOMOのフィッシュ

（fiche）という形で、その選定建築物の特徴なりをまとめていきます。保存要望書・意見書の提出は、このような形です。

ここ埼玉会館にも事務棟の入り口を入った正面の館内案内板のそばにDOCOMOMOの選定プレートがありますが、モダニズム建築に関する啓蒙的な活動では、この選定プレートを授与して見学会をやったりしています。

（次ページの左の写真）これは昨年、大高正人さんの設計した三春町の体育館の選定プレート贈呈と見学会の様子です。左下は、自由学園で

2. 保存要望書・意見書の提出



3. モダンイズム建築に関する啓蒙活動



去年からDOCOMOMOで卒をいただいて講座をやってる様子です。（上の右の写真）右下は八王子のセミナーハウスです。小さめの展覧会をやって、富田玲子(*5)さんも呼んで話を伺ったんですが、マスクをしていますから多分2022年ごろですね。

これは学術的な調査と日本建築学会等の発表です。保存の研究に関する発表というのは非常に多くありますけど、実は国際的にはあまりないんですね。唯一の場所として、DOCOMOMOが2年に一回開催する学会での発表です。これは2022年にスペインのバレンシアで開かれた国際会議で、日本から参加された2名の方の発表風景です。

あとは保存の教育ですね。若い世代にどうやって伝えていくかというすごく重要な使命があって、左側の上と下は私が勤務する東海大学で、一年生を対象にしたキャンパス・ツアーをやり、「山田守の建築はどんなにいいの？」という話を、一緒に見て回ってスケッチするということもやります。あるいは、

4. 学術的調査・学会発表



5. 保存教育 若い世代の育成



DOCOMOMOに関する発表を学生がやる、あるいは展覧会の準備を学生にしてもらうということも大事でしょう。右上が2021年に、COVIDの影響で全部オンラインでやった東京での国際会議ですけど、その時に教育宣言を採択して、2022年のバレンシアの大会で教育に関する憲章が出ました。

（*5）富田玲子：女性建築家の先駆者として活動。象設計集団の創始者のひとり。丹下健三氏主宰の設計事務所・URTEC（当時）や吉阪隆正氏主宰・U研究室で建築を学び、独立後は、住宅から公共施設まで幅広い建築物を手掛ける。

参考：<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001017.000003670.html>より

DOCOMOMO アイントホーヘン+ソウル宣言 (2014)

「**リユース（再利用）**」「**持続可能性**」が付加された

リビング・ヘリテージ：生きていく遺産

DOCOMOMOの「アイントホーヘン・ソウル宣言2014」で、「リユース」と「持続可能性」という言葉が付け加えられたんです。僕が参加していた時から2010年

ぐらいまでは、ある種、専門的な者、歴史研究者に限られてたような感じがしていたんですが、2010年代、イコモス（ICOMOS）という団体の20世紀建築を対象とする委員会が、「リビング・ヘリテージ（living heritage）」という言葉を使い出したんですね。これ、すごく大事で、「使われ続けていく、生きていく」、まさに今回のセミナーのタイトルにある「生きる」と同じで、「生きていく遺産」というのが提示されたことによって、DOCOMOMO自体の活動が歴史学的な研究機関から設計実務を行う建築家や保存修復家、構造・施工技術者や社会学者などによる、モダニズム建築を20世紀の遺産として、私たちの日常の大切さを未来に伝える、ある種の緩やかな保存、活用を目指すものに変化していったんですね。この時に、UIA（国際建築家連合）やJIA（日本建築家協会）という建築家側も、それに賛同していくという形になった。

ニューロサイエンスと建築が結びついた研究が盛んな欧米

ここからは、そもそも「建築を愛する」というのはどういうことかを、抽象的な言葉じゃなくて、もうちょっと他の領域から考えてみよう、と、今、僕が研究していることです。これは日本建築学会が出している建築雑誌2024年10月号です。タイトルが「100年愛される大空間建築を目指して」という仮の名前がついてますけど、そこに

4. 建築を愛することとは 異なる領域からの視点



日本建築学会建築雑誌
2024年10月号
「100年愛される大空間建築を目指して」（仮）

ニューロアーキテクチャとしての大空間建築—残したいという思いをいかに生み出すのか

ニューロサイエンス（神経科学）及び認知科学領域からの視点

建築を愛すること＝建築に対する共感と想像力を情動として捉え、そのメカニズムを科学的に探究する姿勢

「ニューロアーキテクチャーとしての大空間建築——残したいという思いをいかに生み

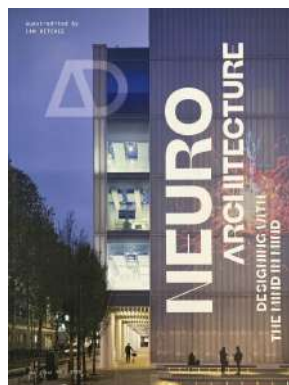
ニューロアーキテクチャへの挑戦

学生時代からの興味

建築と哲学（思想）との関係性
デザインプロセス（発想法+手法）
脳科学+認知科学

ニューロサイエンス Neuroscience
神経科学 神経心理学 神経哲学 神経経済学 神経政治学 神経美学 神経芸術学 神経建築学はないのか？ 心脳問題・脳還元主義への警鐘

Academy of Neuroscience for Architecture (ANFA)の設立(2003)と活動への注目



出すのか」という文を書きました。これは何かというと、ニューロサイエンス、神経科学という領域あるいは認知科学という領域、視点で建築を見ていくということなんです。

つまり、建築を愛することは、建築に対する共感と想像力を情動として捉えて、そのメカニズムを科学的に探求する姿勢なんです。大空間を目にした時に、どういふ

これ、実はヨーロッパ、アメリカではかなり進んでいて、こういう「ニューロアーキテクチャー」という雑誌が出たりで、ニューロサイエンスという学問が、例えば、神経科学、神経心理学、神経哲学、最近結構話題になったのは神経美学。

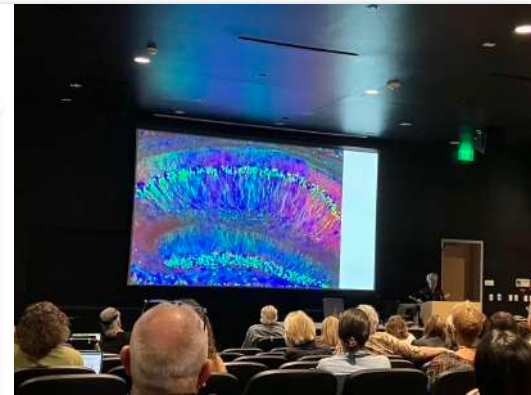
THE ACADEMY OF NEUROSCIENCE FOR ARCHITECTURE

20TH ANNIVERSARY

CONFERENCE PROCEEDINGS

SEPTEMBER 13TH -16TH • 2023 • LA JOLLA, CALIFORNIA

 **ANFA**
Academy of
Neuroscience for
Architecture



建築環境における人間の知覚・感性・身体性・認識に対する新たな関係性を、脳神経科学・認知科学等の知見から客観的・科学的に探求することによって、建築とニューロサイエンス領域をつなげる学術組織

[illegible]



(*6)ルイス・カーン (Louis Isadore Kahn) : 近代建築の最後の巨匠と言われる20世紀を代表するエストニア系アメリカ人建築家、都市計画家。代表作がソーーク研究所 (Salk Institute)。コンクリート打放しにチーク材を使用した木製サッシがアクセントとなった、広場を挟んで左右対照に配置され、空や海と一体となった中庭が特徴の美しい建物。

<https://designmagazine.jp/louis-isadore-kahn/>より

もうひとつの目的は、ルイス・カーン (Louis Isadore Kahn) (*6)の (設計した) ソーク・インスティテュート (Salk Institute)。ここがずっと会場だったんですけど、去年はカリフォルニア大学に移ったんで、どうしてもこれが見たいなと思って、会場から15分歩いて、ここを堪能してきました。

共感と想像力の回復と創造

終わりに、「共感と想像力の回復と創造」というのは？今回のタイトル、「わたしたちと生きる建築」、私たちがモダニズム建築と生きるには一体どうしたらいいのか。

モダニズム建築が、19世紀までの建築が有する価値観とは異なった、より快適で健康的な身の丈に合った生活を安心して送って、将来の希望を育むこ

とができるような建築空間を世界中の人々が手軽に実現することが、おそらく、ル・コルビジェやフランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエ、前川さんを含めてモダニストたちが考えたことだと思うんです。それまでは、非常にお金持ちしか建築を造れなかった。そういう快適な環境に住めなかった。モダニズム建築はそうじゃなくて、多くの人たちにそういう空間を提供したいと、おそらく、前川さんも含めてそういう有名な建築家だけじゃなくて、数多くの名も知らないような建築家、技術者、工事施工者が多分、ラスキンが主張した建築に対する共感と想像力を持って命がけで取り組んだ建築だと思うんです。

そこでDOCOMOMO Japanの重要なことは、そのようなモダニズム建築に込められた彼らの共感と想像力にできるだけ光を当てて、それがどのような建築に命を吹き込んでいるのかを明らかにし、そして20世紀という時代の記憶として、今度は私たち自身の共感と想像力によって未来につなげること。

DOCOMOMOが設立された時、初代の会長のヘンケットさんとヨンゲさんが、彼らの共感と想像力を持ってゾンネストラールのサナトリウムを綺麗に改修したんですね。だから、そういう姿勢が僕はすごく必要だということ。多分、そういう姿勢を持つ限り、何でモダニズム建築を保存するのかという問いは、生まれえないと思うんです。

5. おわりに 共感と想像力の回復と創造

わたしたちがモダニズム建築と生きるには

19世紀までの建築が有する価値観とは異なった、より快適で健康的で身の丈に合った生活を安心して過ごし、将来の希望を育むことができるような建築空間を世界中の人々が手軽に実現すること

数多くの建築家、技術者、工事施工者たちがラスキンが主張した建築に対する**共感**と**想像力**を持って命懸けで取り組んだ建築

そのようなモダニズム建築に込められた彼らの**共感**と**想像力**にできるだけ光を当て、それがどのように建築に命を吹き込んでいるのかを明らかにすること。

20世紀という時代の記憶として、私たち自身の**共感**と**想像力**によって未来に繋げること。

なぜモダニズム建築を保存するのかという問いは生まれえない。

「わたしたちと生きる建築」を考える原点はラスキン「真実の燈」に

おそらくそれは、ジョサイア・コンドルから学ぶことと結びついているかなと思ったんですね。実はコンドルは、19世紀のイギリスで建築の教育を受けているんですが、ひとつも建てずに日本に来て、日本で建築を教えていく。コンドルが持ってきた本に、ラスキンの「建築の七燈」初版がありました。彼は1878年、日本に来て次の年、3月の建築学講義で「建築におけるいくつかの注意点」というレクチャーをするんです。聞いていたのは、辰野金吾たちです。

そこで彼は、「諸君は全世界において過去に建てられた同様な建物を注意深く観察することによって、あるいは他の建築家が開発した創作物を観察することによって、この力、芸術的構想を身につけるであろう」「諸君は地方的偏見、文化、あるいは宗教上の相違を比較するために分析の精神をもつことを決してやめてはいけない」と。言葉を変えると科学的な姿勢だと思います。「さらに諸君は想像力豊かな精神と、本物の趣味(taste)を常に醸成することをやめてはいけない。」実は、そのためにはスケッチブックをずっと持ち歩き、それに見たものを描きなさいと言っているんですよ。そして「偉大な建築家、画家、彫刻家はすべからく想像力の探究と追求とを喜んだ人々であり、それによって自分の創作力を大きくも新しくもしたのである」「諸君は彼の感性に参入することのできる精神をもち、彼の理念を感知する想像力をもたねばならない。」これはある意味、ラスキンの言っていることを彼なりに解釈して言っている。「感性に参入する」ことは、すなわち「共感」を持つことです。

あのラスキンは、やっぱり非常に重要なことを定義していると僕は思っています。その証拠に、実はル・コルビュジエは、シャルル・エドゥアール・ジャヌレというまだコルビュジエっていう名前になってない頃、実はラ・ショー・ド・フォンというところの工芸学校で学びながら、シャルル・レプラトニエという教師に、日々「建築家になりなさい」と勧められたんですね。そのレプラトニエこそ、ラスキニアンだと言われていて、ラスキンの考え方を、美術教育なりに生かしていった人なんです。つまり、ル・コルビュジエは、建築を学ぶときにラスキンの教えを学んでいた。これにはまた、オチがあって、前川國男も実は「今日の装飾芸術」を翻訳した時に、ラスキンのことをやっぱり非常に影響を受けて勉強したと言っています。

「真実の燈」というのは、おそらくモダニズム建築に非常に重要な部分を、それは物理的なことというよりも精神の持ち方、心の持ち方、素直になりなさいというようなことだと僕は思うんですね。ということで、この「わたしたちと生きる建築」は、私たちがモダニズム建築で生きるためには、やはりもう一度そういう共感と想像力をきちんと見直していかないと、回復していかないといけないなと思っています。

コンドルから学ぶこと

19世紀イギリスでの建築修行・教育

ラスキン『建築の七燈』初版(1847)

1878年3月建築学講義 「建築におけるいくつかの注意点」工部大学校造家学科

「諸君は全世界において過去に建てられた同様な建物を注意深く観察することによって、あるいは他の建築家が開発した創作物を観察することによって、この力（芸術的構想）を身につけるであろう・・・諸君は地方的偏見、文化、あるいは宗教上の相違を比較するために分析の精神をもつことを決してやめてはいけない・・・さらに諸君は想像力豊かな精神と、本物の趣味(taste)を常に醸成することをやめてはいけない

偉大な建築家、画家、彫刻家はすべからく想像力の探究と追求とを喜んだ人々であり、それによって自分の創作力を大きくも新しくもしたのである・・・諸君は彼の感性に参入することのできる精神をもち、彼の理念を感知する想像力をもたねばならない」

感性に参入すること＝共感をもつこと



最後に、ドコモモジャパンへのお誘いということで、もしご興味のある方はこのDOCOMOMO Japanのホームページから会員になっていただいて、いろいろな見学会やレクチャーに参加して、ぜひ近代建築、モダニズム建築に共感をしていただければ幸いです。ありがとうございました。



小澤：渡邊先生、どうもありがとうございました。「時代の記憶を私たちの共感と想像によって未来につなげていく」というお話、大変興味深く拝聴しておりました。ありがとうございます。



第2部 未来に生きる前川建築 ～「県民の家」と呼ばれた庁舎～

小澤：第2部は、岡山県土木部都市局建築営繕課主幹の片山大輔さんにお話しいただきます。岡山県庁は、今年の3月に改修工事を終えてリニューアルオープンしたばかりというところで、前川建築の保存といった点についてもお話を伺えたらと思っております。

片山 大輔（かたやま だいすけ）岡山県土木部都市局建築営繕課 主幹

平成17年度(2005年度)、岡山県入庁。令和3年度(2021年度)、総務部財産活用課で県庁舎耐震化工事に従事。令和4年度(2022年度)から令和5年度(2023年度)まで、土木部建築指導課で建築魅力発信業務に従事し、県庁舎耐震化工事の完成に合わせてガイドブック作成、展示コーナー計画、県庁舎見学ツアー企画のほか、岡山県庁舎の登録有形文化財の登録手続きを推進。令和6年度(2024年度)現在、土木部建築営繕課で県有施設長寿命化改修工事等に従事しながら、県庁舎見学ツアーガイドを担うなど、前川建築への深い情熱を抱く。

前川建築・岡山県庁舎との関わり

片山：ただいまご紹介いただきました、片山と申します。岡山県は、広島県と兵庫県の間であって、日本三大名園のひとつ、岡山後樂園や、倉敷という都市があるんですけど、その美観地区が観光地としては有名で、マスカットと白桃が名産です。が、なんと言っても岡山県は「晴れの国」と言われ、非常に気候が穏やかで災害が少ないと言われております。



私は岡山県で生まれて三歳ぐらいまで大阪にいたんですけど、その後ずっと岡山県に住んでおりまして、言葉は岡山弁を話しますが、どうぞ、寛大な気持ちで聞いていただければと思います。

早速ですけど、これが岡山県庁舎です。1957年、昭和32年に建設された前川建築です。



私は今、この6階にある建築営繕課という部署で働いていますが、5年前、平成31年に総務部の財産活用課に配属されました。そこは庁舎管理をしているところで、最初の2年間は出先事務所の耐震化工事をメインに担当しました。そして3年目に、県庁舎の耐震化工事に従事することになりました。令和4年度5年度は、土木部の建築指導課に配属されました。ここは、建築基準法などを担当している部署なんですけど、

私はまさにその法律に基づく条例改正といったことをメインで担当しながら、建築魅力発信という仕事もやってました。今日はその魅力発信という担当で私がやったことをお話しさせてもらおうと思っています。その後、令和6年度から建築営繕課に配属をされ、現在は県有施設の設計や工事、入札などの発注の事務を担当しています。

平31/令元年度	・・・	県出先事務所耐震工事	総務部財産活用課 (庁舎管理)
令和2年度	・・・	県出先事務所耐震工事	
令和3年度	・・・	県庁舎耐震化工事	
令和4年度	・・・	県庁舎魅力発信事業	土木部建築指導課 (建築魅力発信)
令和5年度	・・・	県庁舎魅力発信事業	
令和6年度	・・・	県有施設発注業務 設計・工事	土木部建築営繕課 (県有施設工事)

岡山県の実践（建築編）～建築指導課と建築営繕課の仕事～

岡山県は、建築職がメインの職場として、建築指導課と建築営繕課という課があります。建築指導課では法令に基づく許認可業務の他に、建築の魅力発信として、岡山県内にある著名な建築家が手掛けた作品を紹介したり、その魅力を伝える見学会や展示会を開催したり、一般向けに建物の魅力を伝える仕事もやっています。普段聞けない話が聞けるシンポジウムや、普段入れないところが解説付きで見学できる見学会、その他パネルの展示会などを企画してやったりしています。



左上の写真が、松隈洋先生をお招きしてご講演いただいたときで、その右隣の写真は、解説付きで県庁舎の案内をしてもらっているところです。左下は、前川建築がある自治体が組織している近代建築ツーリズムネットワークの総会を岡山でした時に、橋本功所長をお招きして、参加会員の方にいろいろと見どころを解説していただいたところです。右上は展示の様子です。右下のこういったパンフレットをつくって、広くいろんな人に岡山

にある建物を知ってもらおうということもやっています。

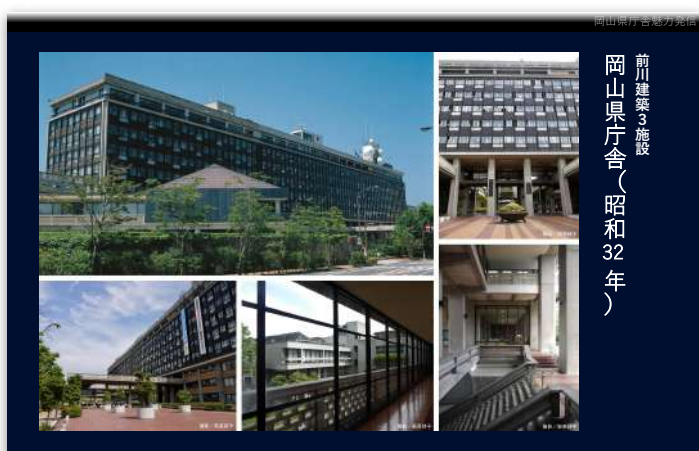
それから建築営繕課では、建築工事に関する営繕業務を担当している他に、建設業界、特に建築分野の将来の担い手確保のため、建築の仕事の魅力を伝えることもやっています。実は、工業高校を卒業して建設業界に進む人は、意外と少ないらしいんですね。そこで、工業高校や建築学科の学生さんを対象に、建築の仕事を知ってもらうための現場見学会や、下の写真のようにコンクリートの受け入れ時のスランプ試験を体験してもらっているところですが、実際に、建築の仕事に触れてもらって、知ってもらって、また身近に感じてもらって、興味を持ってもらう。こういったことも建築営繕課でやっています。



岡山県の前川建築、工業化・軽量化の時代の県庁舎

ここで、岡山県の前川建築について、ご紹介します。

前川建築を観光資源として、近代建築の魅力をPRして誘客につなげていこうという目的で、前川建築を有する全国の自治体のうち、今は9つの県と市が参画して、近代建築ツーリズムネットワークが平成28年に組織されました。それぞれ施設のPRの仕方や取り組み事例などを共有して、観光客

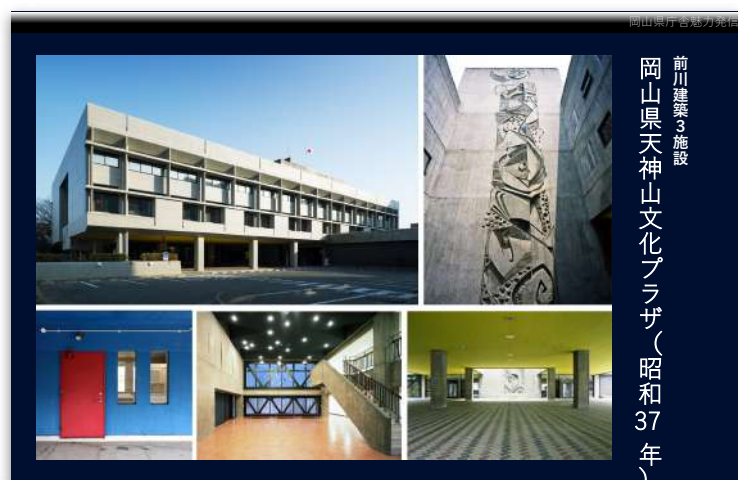


を増やしていくことをテーマにした組織です。埼玉県もこのメンバーで、埼玉会館をはじめ埼玉県立歴史と民俗の博物館、埼玉県立自然の博物館の3施設で構成されています。

岡山県も、岡山県庁舎をはじめ、林原美術館と岡山県天神山文化プラザの3施設で構成されています。前川さんはいろいろな公共建築を手がけていらっしゃいますが、実は、岡山県庁舎が庁舎建築の中で最初の建物だということをちょっと知っておいてもらえたらと思います。

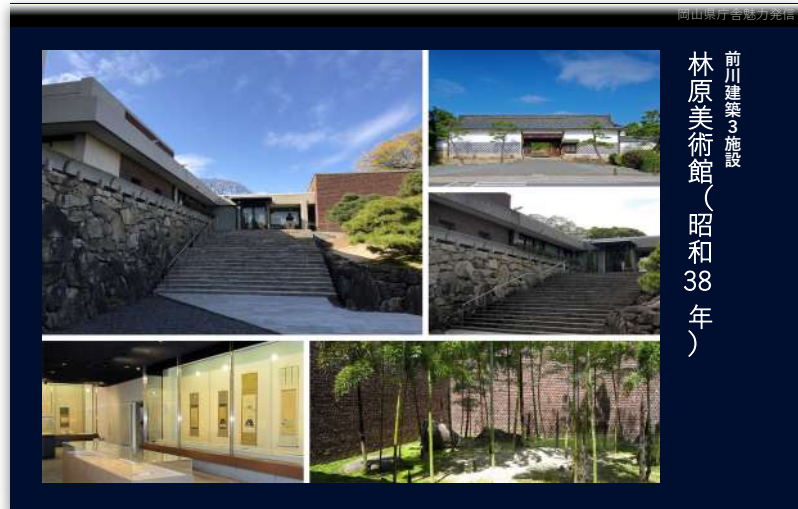
コンクリート打放しの時代に天神山文化プラザ

こちらが岡山県天神山文化プラザで、昭和37年に建設された前川建築です。もともと図書館、展示室、ホールの複合文化施設として開館したものです。高低差が敷地の中にあって、1階と2階をT字に直行させた形で重ねたプランニングになっています。その重なったちょうど1階部分がピロティになって、そこを建物へのアプローチとして計画されています。南北には、プレキャストコンクリートで造られたルーバーがあって、南側は夏の強い日差しを遮るように水平に配置され、北側は西日を調整するように垂直に、縦にルーバーが配置されているのがひとつの特徴になっています。全面がコンクリートの打放し仕上げで造られていて、彫刻があったり星空天井だったり、前川カラーと言われる色使いだったり、たくさん見どころがある施設になっています。



打ち込みタイルの先駆け、林原美術館

それから林原美術館。昭和38年に建設された前川建築です。さっき、岡山県庁舎が最初の庁舎建築だと言ったんですけど、この林原美術館が美術館建築では、これまた最初なんですね。外装材として焼き過ぎレンガという廃材みたいな不揃いな形状や色合いのものを安く調達してきて、これを手作業で積み上げて建物を覆っています。埼玉会館の外装材は打ち込みタイルで覆われていますが、この林原美術館の焼き過ぎレンガの考え方は、積み上げて外壁を覆っている、という点において、打ち込みタイルの前身と位置づけられています。それと、平面プランとしてグリッド同士がつながっていくという考え方や、人の動線として一筆書きという考え方が取り入れられて、前川建築の特徴が随所に見られます。



前川建築3施設
林原美術館（昭和38年）

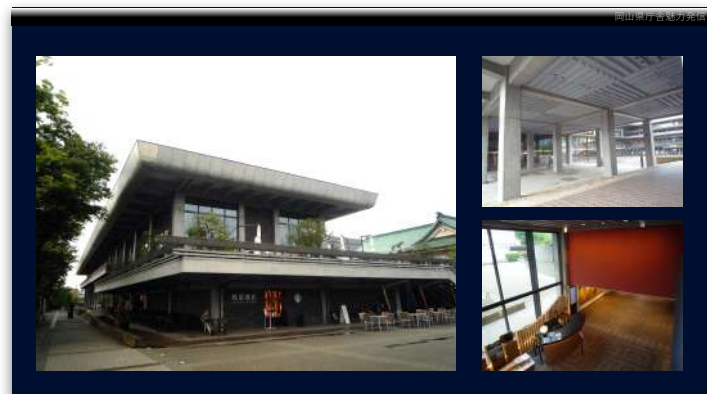
今、紹介した岡山の3つの前川建築は、前川さんが生涯にわたって取り組んでこられたテクニカル・アプローチの系譜の中で、大きく3つに分けられる時代の特徴として、工業化・軽量化の時代には岡山県庁舎が、コンクリートの打放しの時代には天神山文化プラザ、打ち込みタイルの時代の先駆けとして林原美術館が、それぞれ異なった考え方、時代背景のもとに建てら

れ、岡山にはこの3つが揃っているのが「ひとつの売り」だということも知っておいていただけたらと思います。

岡山県庁舎 魅力発信（きっかけ編）～魅力発信業務の方向性を描く～

では、今回ここに登壇させていただくきっかけにもなった岡山県庁舎の魅力発信について、話を進めたいと思います。

この写真は、京都会館です。コンクリートの大きな庇が見えます。コンクリートの打放しの時代に建てられたもので、ピロティがあったり、前川カラーが使われていたり、この建物も有名な前川建築のひとつだと思います。そして





今回、岡山県庁舎の耐震化工事完成に向けていろいろやってきたんですけど、この左側は、私にとってそのきっかけとなった1枚の写真なんです。京都会館にあるこのキャプションですが、「煉瓦タイル壁」とタイトルがついていて、このタイルを紹介した表示板なんです。庁舎管理をする部署で耐震化工事を担当する財産活用課の先輩から「こんな表示板を県庁にもつ

けようと思うんだけど、どう思う」と聞かれ、それがきっかけで私の魅力発信業務がスタートしていききました。

そこで県庁舎の魅力発信を進めていく上で、ちょっと先を見据えて、どんな感じで進めていくかという構想を練って見たんです。まずは「どこが大事なところか」保存ポイントの抽出です。そして「なんでそこが大事なんだ」という保存の理由や価値の整理。次に「どうやって残したらいいだろう」保存方法を検討。それを「どうやってPRしたらいいか」発信方法、「どんなデザインツールがあるか」発信ツール、デザイン。「それらを残していく」保存活用。こういったことを最初に考え始めてからスタートしていききました。

それで、魅力発信ツールとしてどうやってPRしていくかという方向性をちょっと考えてみたんです。誰に発信していくかというターゲットに応じて、例えば専門用語をいっぱい使うと難しくなるので、それをどれだけ噛み砕いて表現できるかという問題があって。最初はちょっと建築関係の人とか建築が好きな人向けのものからスタートして、最終的にはそれがだいぶ噛み砕かれていって、子ども向けにまで持っていけたらいいなと思いました。ツールとしては、ガイドブックという紙媒体のものだったり、今、皆さんはスマホを持っていらっしゃるのでウェブ上に写真などを載せて解説ができたらいなとか、現地で解説する人も必要だとか、いろんなやり方を項目として挙げました。魅力発信業務を進める上で、こういった大きな方向性を最初に頭に置きながら業務を進めていったわけです。



岡山県庁舎（建設編）

次に岡山県庁舎の歴史と建設に関する話をご紹介します。岡山県庁舎はもともと天神山という、先ほど紹介した天神山文化プラザが建っている場所に、木造の庁舎としてありました。そして1945年、岡山空襲によって焼失したのですが、上伊福という地に海軍衣料廠の工場や寄宿舍で使用されていた建物が空いているというので、そこを借りて仮庁舎として運営を始めたんですね。ただ、そこも木造の建物で、実際にはボヤが起きたり、換気も悪く執務環境としては劣悪な状態だった。そこで、新たに新庁舎の建設をと動き出して、1949年に県庁舎位置調査委員会が設置されて、翌年、それが県庁舎復旧委員会という名前に改められ、1952年に現在の内山下という土地に敷地が決定しました。

1953年に基本設計、県庁舎の建築競技、いわゆる設計コンペが実施されて、前川國男建築設計事務所、佐藤武夫設計事務所、日建設計工務、佐藤建築研究所の4社が指名され、前川さんのところが一等当選で設計者に決定しました。翌年の実施設計を経て、1957年に本庁舎本館と議会棟が建設されました。

その後、本館自身や、敷地内に増築が繰り返されて、西庁舎、南庁舎、議会棟新館などが次々と建ち、現在は警察本部庁舎が南庁舎の解体跡にドーンと建って、こういった状況になっております。

明治12（1879）年	旧岡山県庁舎（天神山）開庁
昭和20（1945）年	旧岡山県庁舎 空襲により焼失 仮庁舎（上伊福）遷移
昭和27（1952）年	県庁舎建設敷地 決定
昭和28（1953）年	県庁舎建築競技設計（基本設計） 【前川國男建築設計事務所に決定】
昭和32（1957）年	本庁舎本館・議会棟旧館 完成
昭和46（1971）年	西庁舎 増築
昭和47（1972）年	南庁舎 増築
昭和55（1980）年	議会棟新館 増築
平成3（1991）年	本庁舎東棟 増築
平成16（2004）年	西庁舎 免震改修
平成28（2016）年	南庁舎 解体
令和2（2020）年	警察本部庁舎 完成
令和6（2024）年	県庁舎耐震化整備事業 完了

当時の古い写真をご覧くださいます。左上の写真が、天神山にあった旧岡山県庁舎です。右上の写真が仮住まいとして使っていた仮庁舎。その下の写真が実際のボヤ騒ぎの後の様子です。

（次ページ）左上の写真は、建設前の敷地が決定した時の様子です。既存の多くの建物が建っていることがわかります。右上の写真は、一旦移転しなければならぬということで、家ごと引っ越しをしている状況です。左下の写

真が立ち退きの強制執行の様子です。やっぱり大きい事業ということと、立ち退き、移転ということがあって、トラブルもいろいろ起きていたようです。新庁舎建設にあたっては、工事のことはもちろんですけど、敷地内の移転整理というのが大きな課題だったという記録が残っていました。右下の写真は、バラックの片付けの様子です。建物敷地内、それからその周辺には、無断建築も含めて多くの家屋が当時残っていました。



(昭和28年)



(昭和29年6月)



(昭和30年8月)



(昭和29年7月)



(昭和32年5月)

この写真（右上）は、ちょうど骨組みの鉄骨が建ち上がったところです。周辺は、空襲で焼けたりして、ほとんど低層の建物ばかりだったでしょうから、いきなりこの9階建てのフレームが現れたことは、周りからも世間からもかなり注目を集めていたと思います。

この写真（左下）は完成直後の様子です。まだ川沿いには多くの家屋が残っていて、敷地内の片付けなども多分、残っている状態だと思います。

完成した岡山県庁舎は、当時、新しい材料だった鉄、コンクリート、ガラス、いわゆる工業化製品で構成され、これまでの装飾が施されていた様式主義から脱して、軽い建築、軽量化が図られた近代的な建築でした。前川さんがコルビュジエから学んできたことを具現化し、近代建築の五つの要点を備えた、日本でいうモダニズム建築です。屋上庭園があって、外装のカーテンウォールのデザイン構成というのは自由な立面、水平連続窓。地上部にはピロティがあって、建物へのアプローチが考えられていて、床を柱で支えるシンプルな構成として屋内を自由に間仕切ることができる自由な平面。戦後期を象徴する前川國男が手掛けた、当時では最大規模、そして最初の庁舎建築になります。



(昭和32年)



岡山産業文化博覧会からスタートした新庁舎「県民の家」は三木行治知事の思いが

昭和32年3月19日、地元紙の山陽新聞の記事には、「県庁舎きょう完成式」「岡山県政の殿堂、新県庁舎の完成式と岡山産業文化博覧会の開館式はきょう・・・庁舎に備え付けのミュージック・サイレンを合図に行われる。」と書かれています。

竣工式と博覧会の開館式で、当時の岡山県知事である三木行治知事の祝辞をちょっと紹介したいと思います。「県庁舎は県庁員のものではなく、県民のものだ」と書いてあります。三木知事はもともと医者さんだったみたいで、「病院というものは院長さんのものではなく、看護師さんのものでもない。それを利用する患者さんのものだというのが近代

竣工式と博覧会開会式（式辞／岡山県知事 三木 行治）

～（略）～

実は県庁舎というのは、そこに毎日坐っております県庁員のものではない。県庁舎に色々な物件をもってお出になります県民のものである。病院というものが院長さんのものではない。事務局長さんのものでなく、看護婦さんのものでもない。病院はそれを利用します患者さんのものだというのが近代病院の最も正しい考え方でございますが、それと同じく県庁舎は、あくまで「県民の家」であるという強い信念が庁舎を建設するという私の決意の大きな理由でございます。県庁舎の門をくぐるときは、我が家の門をくぐるような気安さを感じ、県庁舎の一室に腰を下ろされましたときは、我が家の茶の間に坐ったようなくつろぎを感じていただくということこそ、私たちの理想の県庁の姿でございます。

そして県庁舎が百七十万県民の家であるとするは、その完成に際しまして、まずその主人であられる県内の皆様や県外の岡山出身の皆様にもまず第一歩の足跡を印していただき、この庁舎が自分たちのものであるという実感と親愛の情を持っていただくのが当然であると考えまして、この博覧会を企画いたしましたわけでございます。

～（略）～

岡山県庁舎建設時から抜粋

病院の正しい考え方で、それと同じように県庁舎はあくまで県民の家であるという信念が、庁舎建設の私の決意の大きな理由だ」「県庁舎の門をくぐるときは、我が家の門をくぐるような気安さを感じ、県庁舎の一室に腰を下ろされましたときは、我が家の茶の間に坐ったようなくつろぎを感じていただくということこそ、私たちの理想の県庁の姿でございます。」

今回、私の講演タイトルに使った「県民の家と呼ばれた庁舎」というのはこのことなんです。 「近代建築は人間のための建築」と言われますが、それが建築主の親分である知事の言葉として、それを目指して建設されたというエピソードが気に入って、タイトルに使わせてもらいました。そして、県庁舎の「完成に際して、まずは主人である県内の皆様に第一歩の足跡を印してもらい、博覧会を企画しました」となっています。

これが、当時の開催会場の様子です。奥に見えるのが県庁舎で第一会場になっていて、手前の高台になっている部分はもともと岡山城があったところです。それが空襲で焼けて、今は再建されていますが、当時この会場が第二会場となって、盛大に開催されました。

県庁舎ができて、まず博覧会で一般の県民の皆さんに「おうち」を見てもらって、その後、行政機能が移転して庁舎運営がスタートしたというエピソードがあります。

（左下の写真）左側が、博覧会のポスターです。ちょっと近代化っぽい、おしゃれなポスターだなという印象を受けます。右下の写真はパンフレットです。（右下の写真）これが実際の現地の様子で、左上の写真に「岡山フェア（OKAYAMA FAIR）1957」と書いてますね。テーマは「原子力の平和利用」「オートメーション」「石油化学」の3つで、大人から子供、じいちゃんばあちゃん世代も含めて、とても大きなイベントだったようです。

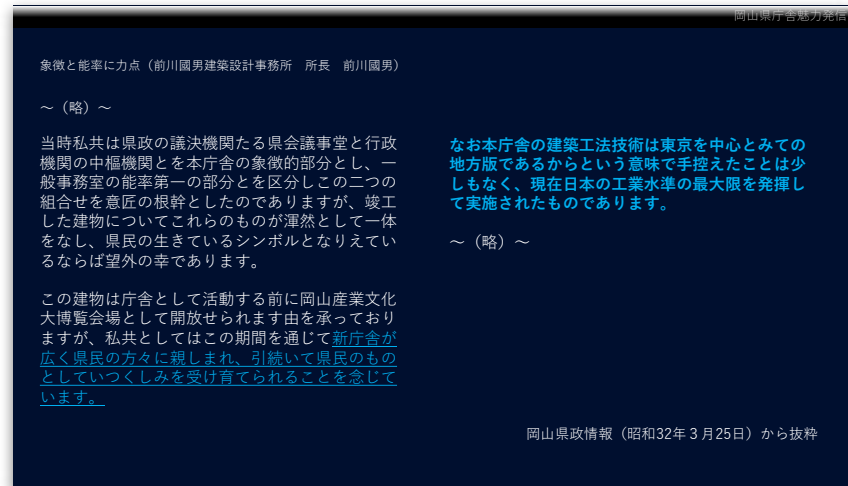




これが前川さんと三木知事のツーショットです。私がトリミングした写真ですけど、スチール製のサッシ、ガラス、コンクリートの打放し仕上げ、床の石張りといった岡山県庁舎の見どころがたくさん写ったすごくいい写真だと思います。

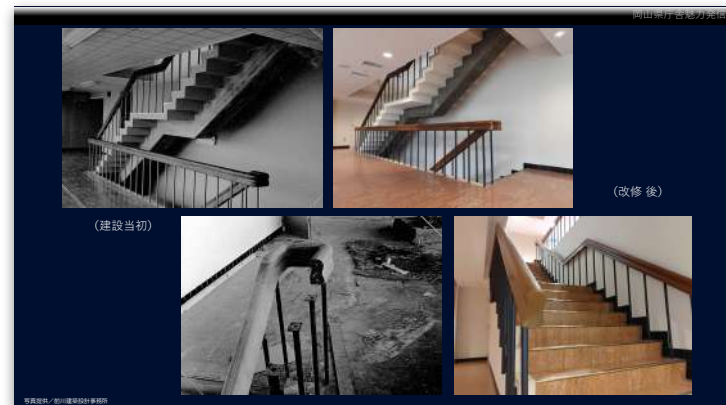
そして昭和32年3月25日発行の岡山県政情報と

いう紙面には、県庁舎の完成に当たって前川さんの言葉が記されています。「新庁舎が広く県民の方々に親しまれ、引続いて県民のものとしていつくしみを受け育てられることを念じています。なお本庁舎の建築工法技術は東京を中心とみての地方版であるからという意味で手控えたことは少しもなく、現在日本の工業水準の最大限を発揮して実施されたものであります。」この言葉もちょっと、私は気に入っていて、造り手と使い手、三木知事と実際に手掛ける前川さんと、それから「県民のものなんよ」という意思。現在の日本の工業水準の最大限を発揮して、まさに当時の新材料を使って実施され、前川さんやその所員の方々が、テクニカル・アプローチとして挑戦していったことが読み取れて、非常に聞き心地のいいフレーズだなと思い、紹介をさせていただきました。



岡山県庁舎 魅力発信（見どころ編）

次は、岡山県庁舎の見どころ、保存ポイントをいくつかご紹介します。これは、庁舎の議会棟にある階段です。左側の白黒写真が昭和32年当時のもの、右側のカラーが現在のものです。当時のまま、今も残っています。特徴としてはなんといってもこの手すりの大きな断面です。ここ埼玉会館にも、東京文化会館、神奈



川県立図書館・音楽堂などにもありますが、前川建築の特徴のひとつ、ドンとぶつかってもびくともしない丈夫さと、手になじむように木製で造られたものですね。

続いて屋上です。左側が当時で、右側が現在です。建設後10年ほどで9階部分が増築され、屋根スラブの位置が一層分、右と左で異なっています。現在の写真では奥の方に所狭し



と設備機器で埋め尽くされ、屋上庭園という機能は失われつつはあるんですが、当時はコンクリートの洗い出しで作られたベンチがあったという記録とその名残だけでもしっかり維持をしていきたいと思っています。

こちらは、地下の様子です。地上のピロティから地階に至る階段には、プレキャストコンクリートで造られた手すりがあり、床の石貼りも当時のまま今も残っています。そして柱の左側は、一時期、屋根がかかったこともありましたが、今回の工事で、当時の地上からの光を取り入れる光庭として、屋根なしの状態に復元しています。

それから、自由な平面というオープンフロアです。左側が竣工時のものですが、すぐに間仕切りをして執務室にされていると思います。実際に、施工された間仕切り壁自体にも、前川さんのテクニカル・アプローチの取り組みが目で見取れるんです。右側が現在の様子で、今は間仕切り壁をなくしてカウンターを配置し、見通し良くなっています。

それから外観のカーテンウォールですが、こちらは改修の前後の写真になります。もともとスチール製だったんですが、表面の塗装が剥がれたり錆びて茶色くなり、板チョコみたいと言われていたんです。今回の耐震化工事では、全面アルミ製に更新をして軽量化を図っていますので、右の写真のように黒々とカカオたっぷりに蘇っております。

今回の改修工事は、昭和32年に建設された岡山県庁舎の本庁舎本館は、耐震性能の不足によって巨大地震に耐えられないという診断結果が出ていたので、写真にある制振ブレースやパネルのような複合型ダンパーという装置をつけて、耐震性能を向上させています。

右上の写真は改修工事前、オープンフロアにする前の状態です。真ん中に廊



下が通っていて、両サイドは間仕切りがあって執務室になっているちょっと閉鎖的な空間だったんですが、それを取り払って今は開かれた空間にしています。

岡山県庁舎 魅力発信（奮闘編）

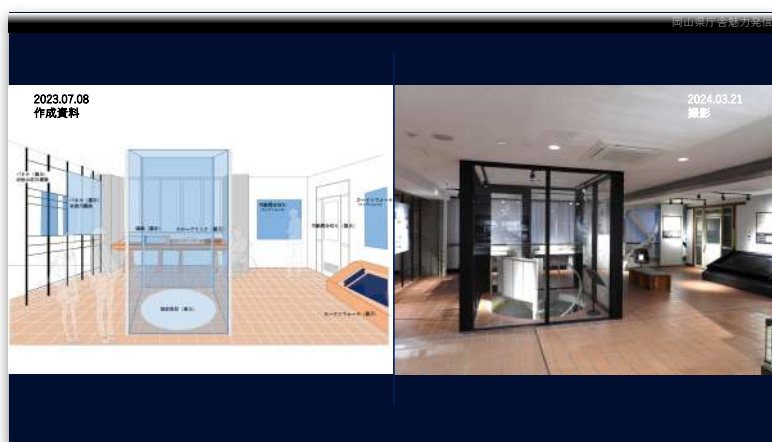
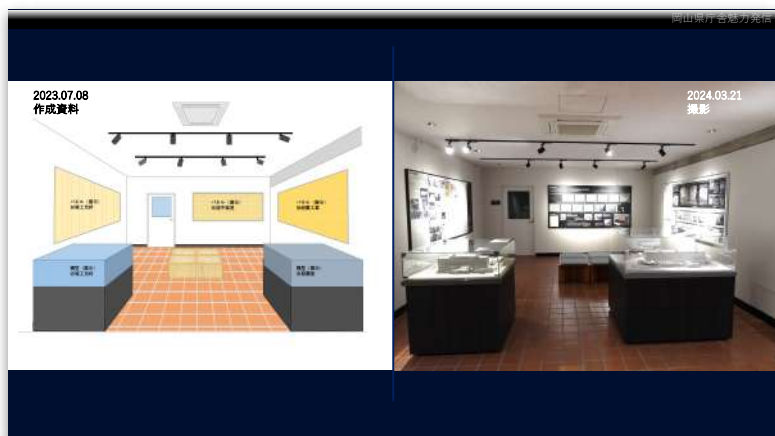
次は、私が実際にやった発信業務の話します。まず、本館の1階に常設で展示コーナーを設けることになったんです。展示コーナーの場所として、通路を挟んで南北に分かれるようなスペースが与えられたんですが、そこに何を置くかという話で、南北それぞれのスペースに、テーマを設定しました。

北ブロックは、既存の螺旋階段があるので、それを展示物として使うとか、設計図面の展示とか、カーテンウォールを全部アルミのものに更新したので、既存のスチールのを展示できないかなと考えて、前川建築に関する展示物のゾーンに設定をしました。

一方、南ブロックの方は、建設当時の様子やいろいろな増築を繰り返していく過程、そして今回の耐震化工事の内容などをまとめて、県庁舎という建物を主役にしたパネル展示ゾーンに設定をしました。

これが南ブロックの計画のパスと実際の完成の状態です。手前には、当時の模型と今回の耐震化工事の完成時点の模型を並べています。当時の模型は石膏でできていて、今となっては非常に価値があるということであえて展示物としてふたつ並べています。

こちらは北ブロックの計画と実際の完成の状態です。奥側に図面やホローブリックという焼き物の外装材を展示したり。右側には実際のスチールのカーテンウォールの現物パネルを展示したり、正面の螺旋階段もそのままの状態を展示しています。この螺旋階段は建設当初からあって、当時は1階が金融機関や会計課という部署が入っていたので、お金を扱うところと地下の金庫室と上下に連絡する役割を担っていました。しかも耐震化工事の直前まで実際に金融機関が入っていて、その通路と執務空間は壁で隔てられていたので、螺旋階段自体が一般の人の目に触れることはなく、県職員でも





限られた人しか知らない、実は秘密の階段だったんですね。それをこのたび公開して、展示そのものにと考えたわけです。

この写真は、竣工時にあった受付カウンターの再現です。さっきお話しした図面展示の下のを、当時の県民室にあった受付カウンターの設計図面から再現したものです。素材は当然、

当時のものとは違いますが、こんなところも、ひと工夫をしてみました。

そして展示コーナーには、A1サイズのパネルが上下2列に配置できるようにデザインして、パネル掲示用のスチール製のフレームを設置しました。この3本の横桟も意味があって、カーテンウォールのパネルの横ラインを意識して3本線にしたんですね。せっかく常設で展示をしているので、何か良いのができたらなと計画をしたもので

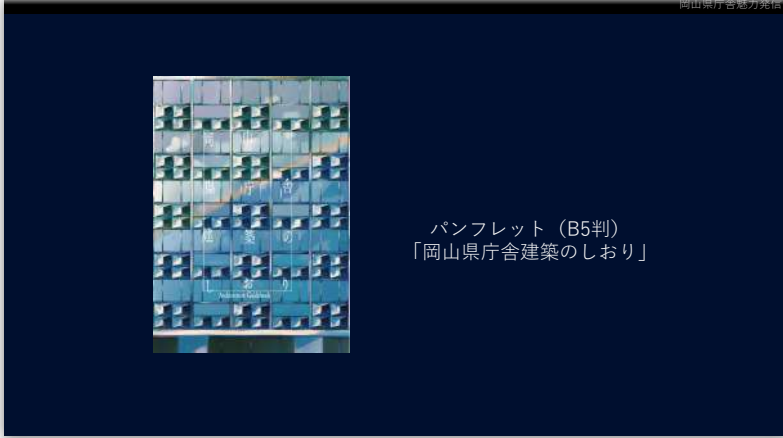


す。これらは多分、言わなきゃ誰も気づかないので、見学会のときはあえて触れます。

そしてそこには、3枚のパネルを設けています。このパネルは、近代建築ツーリズムネットワークに参画している前川建築のパンフレットをまとめたものです。パンフレットを作ってる施設の建築的な特徴や前川建築の見どころを載せた部分を、私の独断と偏見で見繕い、パネルにしました。

学生と作ったパンフレット

今日皆さんに配布をさせていただいてるB5判サイズの三つ折りになった「岡山県庁舎 建築のしおり」というタイトルのパンフレットは、実は岡山大学に昨年度初めてできた建築学を学ぶコースの学生さんと一緒に作ったものです。表紙や中身のデザインも一式、学生さんのアイデアとデザインで、このケンチキ君というニワトリのゆるキャラも参加してくれた学生さんの考案



です。新聞記事にも載せていただいて、先ほどの県庁舎の本館1階の展示コーナーで配布をしています。岡山県のホームページにも掲載していますので、ご覧になっていただければと思います。

満足度120%の見学ツアー

そしてもうひとつ、ガイドブックを作成しました。これは、今年度から定期開催をしている岡山県庁舎の見学ツアーの参加者に、お土産として、もらってありがたいものをというテーマで作ったものです。一般配布はしていないのですが、特別にその中身についてちょっと紹介したいと思います。

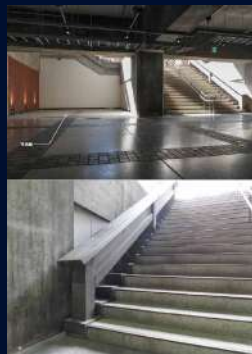


まず巻頭見開きで10ページほど、耐震化工事の完成後に自前で撮影した写真を掲載しています。そして、見開き3ページぐらいにわたって見どころの解説を載せたり、その他県庁舎の歴史や平面計画の概要などをまとめて、40ページぐらいのボリュームに仕上がっています。結構文章を書きましたので、読み物としても参考になるんじゃないかなと思っています。ぜひ岡山県庁舎の見学ツアーに参加していただいて、読んでもらえたら嬉しく思います。

今年度から始まった県庁舎の見学ツアーは、まず見どころをどう回っていくかというコース設定や、説明の内容などを整理していきましました。山陽新聞の方にも取材記事を載せていただいて、関係者を募って予行演習をし、そこでアドバイスをもらって改



ガイドブック (A4判)
「岡山県庁舎 1957~2024」



善点を洗い出し、本番に備えていきました。

この他に、案内するコースに、見どころの解説表示板を配置しました。京都会館の例に倣って、岡山県庁舎バージョンを作ったわけです。一般の人が読んでわかってもらえるように、なるべく専門用語を使わないよう表現を柔らかくしたことが苦労したところです。

登録有形文化財にして観光資源化

そして最後に、岡山県庁舎を登録有形文化財にしようと思い、庁舎管理を担う財産活用課に話を持って行き、県の文化財課にも相談に行ったり資料作りなどの準備も手伝ったり、いろいろ奮闘した結果、ようやく今年の7月19日に答申が出ました。実は、林原美術館が一足先に登録有形文化財に登録されていて、県庁舎もそれに続けとエントリーをし、次は天神山文化プラザが続けばいいなと思っているところです。



最終的にはこれだけの業務量になってしまいました。業務として、財産活用課と建築指導課で連携して2課でやっていこうということだったんですけど、当時、建築指導課にいた私は、魅力発信担当は私ひとりだけで、結構な忙しい日々を送ったんです。それでも、いろんな成果やこういった評価をいただけて、やってよかったなと思っています。

気がつけば、最終的に・・・

- 展示コーナー「前川建築・県庁舎ギャラリー」計画
- 展示パネル作成
- 展示用「岡山県庁舎設計図面」作成
- パンフレット&ガイドブック作成
- 各所案内表示板（キャプション解説文作成）
- 県庁舎見学ツアー定期開催
- 登録有形文化財の登録手続き推進

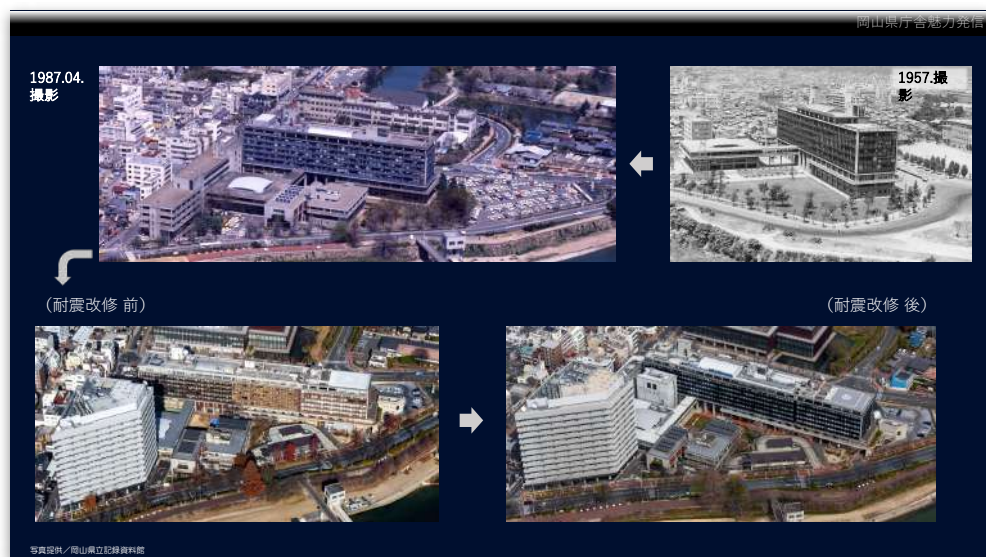
わたしたちと生きる建築（まとめ）

～将来を見据えたマスタープラン作成や専門委員会の設置を～

最後に、少しまとめをしていきたいと思います。

これは、これまでの県庁敷地の様子になります。最初は住宅が並んだ土地で、1957年、岡山県庁舎が建設されました。その後、西庁舎、南庁舎、議会棟新館、東棟と、敷地の拡充に至るほどの増築が繰り返されてきたわけです。その後、敷地内の緑が失われたり、周辺からの景観として庁舎全景がちょっと拝めなくなったり、少し残念かなって感じるところも、実はあったりするわけです。

時代とともに老朽化や耐震性の問題で、残していきたいと望まれている建物が解体されてしまっている現



状に直面している状況において、私達は当然、この建築物には価値があると思って、それを根拠づけるお墨付きとしてDOCOMOMO選定や登録有形文化財の看板がついて、耐震補強を含めた大規模な改修工事の中、できる限りの保存や復元を考えながらいろいろやってきたんですけど、もっと時間があればとか、これがちょっと残念だったなという反省点も実はあります。より具体的に工事の中に入っていくにつれて、当時決めていた設計の内容よりも「ここはこうしたい」という思いが強くなっていったこともあり、そういったところの解消として、将来を見据えた敷地内の増築の計画、敷地のマスタープランみたいなものができたら、時間的な余裕だったり、計画的な改修だったり、直前でバタバタ決めていなくてももっとより良い道を進めるんじゃないかなと、ちょっと個人的に思いました。保存何とか委員会のようなものが設置されたりして、専門家の方々の意見が聞ける機会を持つなど、ぜひ時間的な余裕があればやった方がいいなと思います。

記憶と記録に残る建物を

これらの写真は県庁舎の建設時、それから建設後に撮影されたものですが、この写真のように建設時の博覧会とか見学で県庁を訪れた子どもたちの記憶には、きっと当時の情景が残っていると思います。実際に県庁見学ツアーに、建設当時を知っている年配の方が来られたこともあって、「あのときはああだった」といろいろ話が止まらなかったそうです。子どもたちに「前川建築」と言っても、「なんのこっちゃ」というところでしょうから、まずは建物の魅力を伝えることが大事じゃないかなと思います。

これらの写真は、県庁舎の建設作業です。ビッグ・プロジェクトの庁舎建設には、多くの人が携わって建物という目的物を完成させていくわけですけど、今と違って当然アナログな作業、機械化されていない手作業が多かったと思います。当時の皆さんが頑張って造られたものだというエピソードとともに、夜間作業で急ピッチで工事が進められたという記録も残っていました。さらには、前川さんたちが挑戦してきたテクニカル・アプローチという取り組みが今もなお形として残っており、鋼製ではなくてあえて木製として生産し

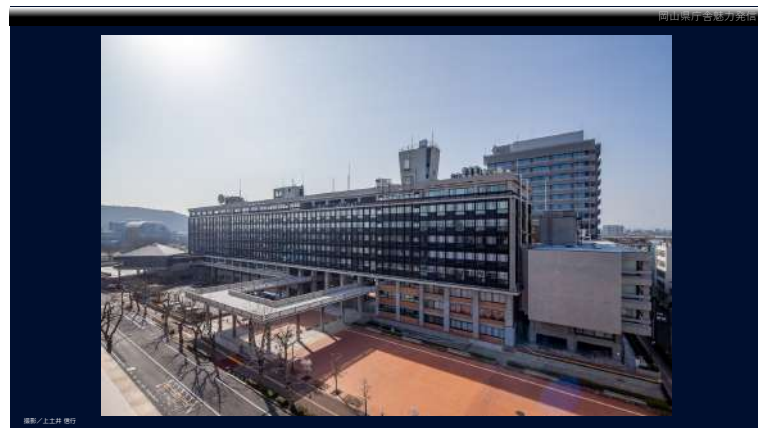


た可動間仕切りや、特殊ホローブリックという焼き物を外装に使ったこと、それからスチール製のカーテンウォール、コンクリート打放し仕上げ、石貼りの床仕上げなど、それぞれが素材の良し悪しを研究して施工に至ったものです。

これまで生きてきた建築が、それぞれの時代に応じてどう生き続けてきたかという視点でちょっと考えてみて、どういった思いで建てられ、使われ、親しまれてきたかという歴史を知ることは、結構大事なかなと思います。きっとそこには何かしらのエピソードがあって、誰かの思いがあると思うんですね。形を残すというのも大事なんですけど、そういったエピソードとか足跡の記録も大事だなと思います。それがこういった場での意識の共有だったり、施設ごとのPRだったり、多くの人の目に触れることで、多くの人の記憶と多くの記録に残る建物がこれからも増えていくことを願っております。

「県民の家」というコンセプトで建てられた岡山県庁舎ですけど、60年以上経過して、これからまたさらに「県民の家」であり続けられるかどうか、そういった意味でここから再出発だと言えますし、管理する我々県庁職員の責務のひとつでもあります。その試みとして、今回の話が少しでも参考になれば嬉しく思います。

ご清聴ありがとうございました。



小澤：片山さん、どうもありがとうございました。67年間という長い間、県民の皆さんに愛された岡山県庁舎の歴史ですとかたくさんの魅力を、たくさんの資料とともにご紹介いただきました。



第3部 トーク・わたしたちと生きる建築

小澤：それでは第3部を開始させていただきます。トークの前に前川建築設計事務所の橋本所長にまずお話を伺いたいと思っております。

橋本 功（はしもと いさお） 株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長

1945年、神奈川県生まれ。1970年、日本大学理工学部建築学科卒業後、(株)前川國男建築設計事務所入所。1994年、(株)前川建築設計事務所取締役。2000年、代表取締役に就任、現在に至る。担当した主な作品は、福岡市美術館（1979）、埼玉県立自然史博物館（現・埼玉県立自然の博物館）（1981）、国立音楽大学講堂（1983）・国立音楽大学付属幼稚園（1984）・附属中・高等学校増築（1995）・附属小学校（2008）、千葉県東総文化会館（1991）、埼玉県児玉町総合文化会館（1995）、など。この間、弘前市から熊本県までの、使われている全国の前川建築の保全改修や前川建築に関する様々な活動に精力的に係わり続けている。

橋本：渡邊さんと片山さんのなかなか深い、いい話をお聞きしましたので、ちょっと私の方はリラックスしてお話をいたします。

埼玉会館 前川國男 建築セミナーを振り返る

この前川國男建築セミナーは2014年から始まって、埼玉会館について、様々な観点でお話をいたしました。皆さんの中にはずっとお聞きになっている方もおられるかもしれません。これは、そのときの各チラシです。この埼玉会館地下1階の前川コーナーにも掲示してあります。

1回目は、埼玉会館の特徴であるエスプラナードと打ち込みタイルの話をしました。2回目は、埼玉会館のホールについての話と、埼玉大学管弦楽団のアンサンブルにいろんな場所で音を出してもらって聞き比べ、どこがいいかという話をしました。

3回目は、埼玉会館がちょうど改修工事に入った時期でここではできませんでしたが、大宮にあります歴史と民俗の博物館で建築的プロムナード、いわゆるアプローチの仕方等を含めたプロムナードという考え方をお話いたしました。4回目は、ものづくり大学の八代克彦先生を含めて、コルビュジエのカップ・マルタンの休暇小屋の話から、コルビュジエを含む近代建築の流れを俯瞰した埼玉会館の建築的な背景は何かというちょっと難しいお話をいたしました。5回目は、前川の発したいろいろな言葉から、埼玉会館に込めら



れた思いを探りました。6回目は、前川が設計した東京文化会館等を含めて六つのホールについての響きの特徴、そしてこの埼玉会館ではマリンバ奏者の塚越慎子（つかごしのりこ）さんをお招きして、マリンバを舞台のあちこちに移動して響きの聴き比べと演奏を行いました。7回目は、ちょっと変わった視点で、写真家の長山一樹さんから、フォトグラファーの見る対象と背景としての埼玉会館の心地よさ、いわゆる写真家にとってこの埼玉会館の場面を撮っているときに、どうしてこういう場面を撮るのかというお話をいただきました。それから8回目は、歴史と民俗の博物館の池田伸子さんと、長瀬にあります自然の博物館の井上素子さんを交えて、「埼玉の自然、暮らし、文化に寄り添う前川建築」というテーマでいろいろお話をいたしました。9回目は、永田音響設計の福地智子（としこ）さんに来ていただきまして、音響設計から見た埼玉会館の大ホールという話を小ホールで行いまして、その後、大ホールで埼玉オペラ協会によるオペラのワンシーンをみんなで聴きました。そしてこの画面に載っている最後の10回目では、埼玉県芸術文化振興財団とさいたま国際芸術祭実行委員会の主催、ものづくり大学の協力によって、「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす」フォーラムとの合同企画として、コメンテーターの青山恭之さん、それからものづくり大学の藤原成暁先生と八代克彦先生より、コルビュジエのカップ・マルタンの休暇小屋を主に「五感に触れる建築〜ル・コルビュジエから前川國男に引き継がれた思想の遺伝子」というお話をいたしました。各回いろんな観点から、10回行ったわけです。

今まで私は、前川建築のいいところを、説明あるいは解説しようという思いの話がメインだったんですが、今回は、皆さんと一緒に生きている建築という視点、皆さんからの発信を受け止めるということに大きく転換しました。

それで「わたしたちと生きる建築」とはどういう建築なのかについて、まず私の思っている話から始めまして、その後、渡邊さんと片山さんにもう一度壇上に上がっていただいて改めて簡単にお話をしていただき、その上で時間の許す限り、今日は皆さんにとって「わたしたちと生きる建築」とはどういうこと、どういう意味、どういうふうな思い、そういうことを皆さんからたくさん聞きたい。そしてこれからは、わたしたちの生きる建築はこう思ってるよということをテーマにした皆さんからの思いを、セミナーの形で展開できればいいなと思っています。

地域や街の歴史や記憶に育まれたコミュニティが大事にされない危機感

戦後から80年を迎えようとしている今日、私達の生活環境はこの間、ものすごく変わリつつあります。これは皆さんも感じておられると思います。例えば、昔からの地域あるいはその地域に根付いて生まれた街の景観や商店街、あるいは森や小さな公園、こういうものが大型の駅前再開発などで、大きな複合商業施設や超高層のオフィス、あるいはタワーマンションというものがどんどん建ち並んできて、今まで自分が感じていた、知っていた街が全然変わってしまった。そこには、まさに街の歴史や記憶、こういうものに育まれてきた地域コミュニティというものが、本当に跡形もなくどんどんなくなっている、そういう街をあちこちで見るわけです。こんにちの都市は、あるいは建築は、地域の歴史や文化、記憶を本当にそのまま感じられることがあるのか、あるいはこうしたことを大事に

しようという思い、こういう生活があって地域社会があるんだという、そういう「まちづくり」がどれだけでできているのだろうか、最近、非常に疑問に思っております。

前川建築は、生活者の視点から造られた建築

そこで思い出すのが前川の次のような言葉なんですね。「都市環境と人間生活の関わり合いから考えていこうとする市民生活的な視点が重要な位置を占めてきている。」「人間とは、常に社会的存在であり、自然や社会生活の中の存在として活かされている存在であって、大事なことは、建築じゃなくて人間の生活です。」大事なことは建築じゃない。人間の生活なんですよ。「生き生きした人間が生の実感を持ってないならば、その環境に美しさが出てくるはずがない。」と。

前川は、建築というものを創る前にその街をよく調べ、街の生活が生き生きしているか、その生き生きとした生活をさらに建築で表現するにはどうしたらいいかという建築創りにこだわっていた。こうした言葉から、「人間の建築とは自然や都市環境における生身の人間の生活と関わり合い、生きているという実感を持てる空間への意識が込められており、建築とはそうした存在である。」という前川の思いを、僕らは知ることができます。

こうしてみると、今日のテーマである「わたしたちと生きる建築」というのは、私達の身近な生活の場と共にあり、自分の居場所、これを介して親から子へと、世代あるいは時代を超えて変わらぬ、生きてきた記憶あるいは歴史、愛着、こういうものが感じられる居心地のいい建築、居心地のいい都市、という生活者からの視点、使われ続ける建築の原点。これがまさに「わたしたちと生きる建築」というキーワードの根源ではないかと思う次第です。そこに住んでいる人たちが、自分たちの街あるいは身近な都市の中で、この建物に愛着を持てるというその思い、それが「わたしたちと生きる建築」の一番大事なことであり、このことがより多く広がることによって、街づくりあるいは自分の街の大事な建物、あるいはモダニズム建築を残していく、あるいは大事にしていこうという思いに繋がっていく運動力の大きな根っこになるんじゃないかと。

これからお二方にまた上がっていただいて、長持ちし広く使われ続けるためのあり方を含めてお話を聞いた後、皆さんにとって「わたしたちと生きる建築」と思うその思いをいろいろお聞きしたいと思います。

居心地の良いこと、使い続けて記憶を繋ぐことの大事さ

小澤：ではここから改めて、トークを開始させていただきます。

今、橋本所長にいただいたお話を受けて、まず片山さん、「わたしたちと生きる建築」について思いをお伝えいただけますでしょうか？

●建物と空間をどう構成するかといった問題を、都市環境と人間生活の関わり合いから考えていこうとする市民生活的な視点が重要な位置を占めてきている。

●人間とは、常に社会的存在であり、自然や社会生活の中の存在として活かされている存在であって、大事なことは、建築じゃなくて人間の生活です。

生き生きした人間が生の実感を持ってないならば、その環境に美しさが出てくるはずがない。

■人間の建築とは、自然や都市環境における生身の人間の生活と関わり合い、生きているという実感を持てる空間への意識が込められており、建築とはそうした存在であるということが出来ると思います。

■「わたしたちと生きる建築」とは、わたしたちの身近な生活の場と共にあり、自分の居場所を介して、世代・時代を超えて変わらぬ、生きてきた記憶・歴史・愛着を感じられる居心地のよい建築という生活者からの視点

■「わたしたちと生きる建築」というキーワードは「使われ続ける建築」の原点

片山：そうですね、私達と生きる、共に生活の中にある建築は、自分としてはやっぱり落ち着きがあって居心地がいいところを一番求めるので、当然、居心地の良さをみんなと共感できる建築が街の中にあってほしいなと思います。自分が居たいと思えるところがやっぱり一番いいなと思います。

小澤：渡邊先生、いかがでしょうか？

渡邊：DOCOMOMOが大きく変わったひとつの要因として、ICOMOSの20世紀委員会が「リビング・ヘリテージ」「生きていく、生きる遺産」という言葉を使った。やっぱりそれがすごく重要で、往々にして歴史的建築物を保存するときにオリジナルに戻してとか、オーセンティシティー(authenticity)(*7)とかちょっと難しい概念でやっていくんですけど、近代建築、モダニズムの建築の場合は材料を変えたとしても、あるいは現代の今の生活に合うようにオリジナルを少し改変したとしても、やっぱりそれを使い続けていくことの方が重要なんだという方向にシフトしたことがすごく大きいなと思っています。

福岡にある僕の実家は、別にモダニズム建築でも何でもない普通の家ですけど、そこを掃除しながら、なんか昔ここで勉強したなとか思い出すんですよ。そういうことって人間が生活していく上でやっぱりすごく重要なことかなと思っていて、今のまま行くと、本当、記憶喪失になるんじゃないかなという気がしてしょうがないですよ。

小澤：ありがとうございます。ここからは会場の皆様からの思いなどを伺えたらと思うんですけども、いかがでしょうか。

施主の思いが建築にどう生きるか

参加者A：私は、建築はアクティビティーを支えるものだと思うんです。アクティビティーが家だったら、生きてることですね。それで、いい建築家は施主の思いを、そのアクティビティーに対する思いをよく理解して生かすようにしてくれると思うんです。

今日伺ったところで、例えば、岡山県知事の思いとして書いてあった「県民の家」という言葉はごく表面的な言葉で、その中に、県民はどういうふうにこれから生きていってほしいか、今、県民が苦労していることは何なのか、県として何をしたいか、そういうことがいっぱい入っていると思うんですよ。建築家、前川先生はきっとその知事とお話になって、それでキャッチフレーズは後回しでも、何を望んでこういうものを創りたいかということをまずスタートラインにされて、それで多分、建築事務所の中でも、皆さん、仕事を始められるときにそういう話をよくされてたと思うんですよ。施主の話も自分の抽象的な話も含めて、いろんな考えをされていたと思うんですよ。橋本先生は身近にいらしたんだから、そういう話をもっともっと残していただきたいと思います。

(*7)オーセンティシティー (authenticity) : [信頼](#)がおけること。[確実性](#)。[真実性](#)。信憑性。真正性。

<出典 [小学館](#)デジタル大辞泉>

古い県庁舎を現在の環境基準に合わせて残す工夫は

参加者B：今日、初めて参加いたしましたけれども、渡邊先生のお話を聞いて、古いものをいかに残すかという部分、どうやって生かしていくのかという部分に対して改めて考えさせられる感じでした。

片山さんの庁舎のお話にちょっと質問がございまして。前川建築が非常に文化的にも残すことに意義があるという部分は重々お話の中に伺えたんですが、昨今の公共建築の中で、いかに脱炭素とか省エネといった、これから建物を生かしていく上で、より環境の負荷に対してやらなきゃいけない部分、特に古い建物を残すには、文化的な部分と、あとは残すことによる意義を考えつつ、さらに環境の負荷を下げるというような観点が多分あったんじゃないかなと思ひまして、お聞かせいただければと思っております。

片山：岡山県庁舎の耐震化整備事業としては、制振ブレースなどの耐震化工事とコンクリートの中性化などの長寿命化工事をしております。それと、もうひとつの柱として、庁舎の防災機能を強化しています。その中で環境面ではまず、窓を元々のシングルのガラスから二重サッシに変えております。それから、北と南にそれぞれ窓があつて東西方向に廊下が走っていたんですけど、北と南の温度差から執務環境がだいぶ違ったんですね。中で仕事をしている人は、冬場は暑い暑いと窓を開けている南側の人がいれば、寒い寒いと言って窓を閉めて震えている北側の人がいたので、空調設備の改修も高効率のものをつけたり、トータル的に執務環境の改善をいろいろしております。

どこの都道府県も同じように、当然、災害のときに防災機能として機能しないといけないう重要な建物のひとつですので、岡山県庁舎もそういった防災面の強化や整備を優先にしています。

閉塞感漂う浦和の街の変貌ぶりと「魅力的な街づくり」を考える

参加者C：橋本所長の先ほどの10回のお話がございましたが、私、全部参加させていただいてました。本当に素晴らしいセミナーで、今日11回目にも参加させていただきまして、ありがとうございます。

私は、単体としての埼玉会館が大好きなんですね。手すりもインテリアも、来るたびにいろいろ確認するような状態です。先ほども、籐のくずかごをまた見てきたりして、ほのぼのしてるんですけども。

埼玉会館単体としては本当素晴らしい。いつまでもあつてほしいと思っておりますが、ちょっと目を転じて、エリアとして浦和を見ますと、私はもう閉塞感というか窒息しそうなぐらい息苦しいんですね。旧中山道沿いの街づくりのプランニングが全然ないと思ひえないんですね。政治的な意味じゃなくて、生活実感としての、民主主義って感じで考えても、どこでどうしてこういうことになっちゃうんだろうと、本当につくづく悲しくなってるんですね。それを決めるのは、政治ももちろん絡んでいるでしょうし行政もイニシアチブを取ってると思いますが、どうして誘導とか規制が掛からないんだろうか、どうし

てこういう浦和の、悲惨な旧中山道沿いの街が形成されてしまうんだろう。これから10年、30年、50年経ったとき、どうなるんだろうと。私は5歳から82歳の今日まで、浦和で小中高と過ごしてきましたけれども、ちょっと絶望的な意識に苛まれてます。よろしくお願いいたします。

橋本：昨今の話では、例えば神戸市の報道でありましたが、神戸市の人口が少なくなる中で、投機の対象になりがちなタワーマンションが老朽化したときに、改修とか撤去となっても相当膨大な費用がかかるので、そのまま街が廃墟になる可能性がある。だからタワーマンションの建設規制をエリアごとに決めてやってる。

僕ら自身も街の中に住んで、例えば、渋谷はちょっと前まで歩けたのに今、どこがどうなってるのかわからなくなって歩けない。このようにどんどん変わっていく中で、住民の力あるいは発言力は、なかなか大きな力にならない。文句を言うしかできなくて。住民の声が行政に届く方法は何かないだろうかといつも思うんだけど、なかなか難しい。

でも例えば、この11回目の回のように、どうしたらいいだろうかという声を上げるチャンスもゼロではない。成果はわからないけど、そういうところで多少声を上げて、点と点のいろんな思いがネットで繋がって、何かひとつの大きな力になって行政に届くというようなコミュニティの作り方が、何かそういうものも、僕らが生きている時代にはできないかもしれないけど、子どもたちのためにも考えていかないと、少しでも自分のできる範囲で動いていかないといけないのかなという感じも正直するんです。

今、お話を聞いていて、私達の建物はこういう思いだよっていうことを発表してもらおうというのもいいかなと思いました。

渡邊：DOCOMOMOとしても、建築を単体じゃなくて街並みというか、いくつかの建築をひとつのものとして、群として選定していくことをやってます。一番顕著な事例は、島根の県庁舎。あそこは菊竹清訓さんや安田臣（やすだ かたし）さんが設計した建築5つを同時に指定をしている。つまり、群としてその街並みを構成してるんですね。これはDOCOMOMO Japanがやってるわけじゃなくて、DOCOMOMOの本体の方もそういう捉え方で、例えばその景色を構成しているという形で指定をしている。

代官山のヒルサイドテラスも50年60年かけて、街並みを槇文彦さんがずっとデザインされてるんですね。この間亡くなりましたけど。DOCOMOMO Japanは、最初は1969年にできた第1期を指定していたんですけど、今は1998年完成の代官山ヒルサイドウエストの6期まで含めて指定しています。だから群として指定するというのは物理的なことも同時に、空間的な時間的な話ですよ。1969年から1998年まで30年間をかけて街並みが構成されてるということで指定をすることによって、より街が魅力的なものになっていくし、それが未来に繋がっていくんじゃないかなと。

小澤：そうすると建築にとって時間というのが、すごくキーワードになってくるということですよね。

建築や街並みを愛して研究してアピールに熱心なのは岡山県だけじゃない

参加者D：今、群としてその街並みなり建築を見るということで、たまたま僕の新潟県の故郷の関川村では、「石置木羽葺屋根（いしおきこばぶきやね）」という国指定重要文化財の渡邊邸があるんですけど、最近、「石置木羽葺屋根」の保存ができる職人さんがあんまりなくてなかなか維持管理ができない。その渡邊邸も含めて、かやぶき屋根の津野邸と佐藤邸、これも重要文化財で、未だにそういう江戸の町並み、撞木造り(*8)の家並みが残っていることは、世界的にも大事であると言われていて、それを何とか僕は保存したいなと思ったんですが、・・・

今日は、片山さんの岡山県の営繕課や建築指導課は、前川建築にかなり取り組まれて皆さんにアピールされたと聞いて。僕は千葉県庁で営繕とか建築指導行政もやったOBなんですけど、岡山県のようなことをやってる自治体というのはあんまりないと思うんですね。片山さんみたいに、自分たちの庁舎なり、僕の故郷の家並みもそうなんですけれども、誰かが一生懸命愛することが、研究して皆さんにアピールしていくことが、今後残すことに繋がるんじゃないかなと思ひまして、今日のお話を聞いて、示唆を受けました。

片山：岡山県では、魅力発信ということであれば建築指導課がやってますし、9つの自治体で組織している近代建築ツーリズムネットワークの担当は、建築指導課がやっていますが、岡山県だけでなく香川県や、先ほど渡邊さんからお話があった島根県もすごく建築の魅力発信ということはされているんですよ。岡山県庁舎は今年度の5月から見学会を定期的に小規模でやってますけど、コロナ禍前では香川県はもうちょっと頻繁にされていましたし、島根県にも非常に面白い熱い方々がいて、建物の魅力発信でラジオ出演をしたりして、すごく盛んにいろいろ取り組まれています。そういう自治体は、探せばもっとあるのかなと思います。

住宅にも宿る、積み重ねてきた生活の記憶と時間

橋本：私の知り合いで、今、住宅遺産トラストという名前で住宅を保存改修しながら残していこうというグループがあるんですが、広い意味ではこのグループの行為も「わたしたちの建築」という思いに通じるので、住宅遺産トラストの木下壽子さんに、このグループの話と木下さんの「なんでそんなことをしてるの」という思いを簡単に語ってもらえますか。

木下：一般社団法人住宅遺産トラストという団体で理事をしております、木下と申します。実は今日、初めて埼玉会館にまいりまして、とても感動しています。渡邊先生のお話にラスキンのことが出てきましたが、まさにラスキンの時代、オクタヴィア・ヒル

(*8)撞木造（しゅもくづくり）：撞木とは仏具の一種で鐘・鉦(かね)（たたきがね）などを打ち鳴らす丁字形の棒（かねたたき）のことだが、その形に似ている寺社建築を撞木造りという。

<https://adeac.jp/nagano-city/text-list/d100040/ht001910より>

(Octavia Hill)(*)9という女性がナショナル・トラスト(National Trust)(*)10を立ち上げた時代背景と、15年前に私達が住宅遺産トラストの活動を始めた状況に共通するところがあるなど感じたのと、片山さんのような方がいらっしゃる岡山県はとても素晴らしいなと、今日のお話を伺って思いました。そして橋本所長が、前川さんは「そこで暮らす生活が建築より大切なんだよ」と言っていたとおっしゃっていましたが、そこは本当に重要な部分かなと。先ほど司会の方もおっしゃっていましたが、「建築」と「時間」、それも非常に重要な視点で、今日は、良い建築を大切に長く使っていく上で重要なテーマがたくさん出てきたなと思います。

私は元々、日本女子大の住居学科で、住宅の建築、設計を学び、その後、建築史、とくに近現代の住宅について学びましたが、ちょうど今日ご登壇された渡邊先生と同じ時期にイギリスにいました。イギリスでは、歴史ある本物の建物の方が人気も価値も高く、町並みも様々な時代のものが共存しています。イギリスから日本に帰国したあと、われわれ建築を学ぶ者からすると、教科書や雑誌に出ているような家が「古家付き土地」、つまり建物を壊すことが前提で売りに出ていたり、人知れず壊されているという状況に衝撃を受けました。文化財でも壊されるというのが日本の戦後の不動産市場の現実であるということに、イギリスから帰国し、仕事を始めてから気づき、ショックを受けました。

そのきっかけのひとつが、江戸東京たてもの園に移築されている旧前川國男自邸の跡地に、1974年に建てられた上大崎の新前川國男自邸です。2007年の終わりごろ、前川國男さんの自邸が壊されるかもしれないということを、今日もご参加いただいている松隈洋先生から伺い、すぐに建物を見に行きました。もう1軒、同じ時期に、園田高弘邸という、吉村順三さんが設計し1955年に建てられた戦後の小住宅が自由が丘にあり、この家も継承者が見つからなければ壊されるかもしれないということで、この2軒の重要な住宅を解体の危機から救う、というところから住宅遺産トラストの活動が始まりました。

「建物を残せるか残せないか」、相続税の問題など住宅の場合は色々ありますが、やはり住んでいる人がどれだけその家を愛しているか、そしてそこに積み重ねてきた生活の記憶や時間、そうしたことが残るか残らないかのひとつの大きな要素だなと、活動を15年続けてきて思っています。

公共建築の場合は、この埼玉会館も岡山県庁舎もそうですが、いろんな方が接することができ、その建物を愛する人たちの力で残っていくのだなということを、今日、本当に実感しました。住宅についても、ひとつの家族がそこに住めなくなったとしても、新しい所有者に継承していただき住み継いでいくという活動をやっておりますので、ぜひ皆さんに住宅遺産トラストのホームページを見ていただいて、「わたしたちと生きる建築」という流れの中に、住宅建築も入れていただけたらなと思いました。本日はありがとうございました。

(*)9)オクタヴィア・ヒル(Octavia Hill)：イギリスの先駆的な思想家であり社会改革者。ナショナル・トラストの3人の創設者のひとり。都市住宅の改善と緑地の保護に精力的に取り組む。人間の幸福のためには自然へのアクセスが重要であり、自然景観の破壊を食い止める必要があるという彼女の信念は、今日でもなお、その重要性を増している。<<https://www.nationaltrust.org.uk>>

(*)10)ナショナル・トラスト(National Trust)：歴史的建造物と自然の保護を目的とする英国の民間団体。1895年設立。寄贈や買い取りによってその土地を入手し、保全・管理する。<出典 小学館デジタル大辞泉>

市民の活動で存続の危機を脱した宮城県立美術館

参加者E：現在、浦和と仙台の2拠点生活をしている者です。埼玉会館は子供のピアノの発表会やPTAの活動で来ると懐かしく思い出せるので、自分が活動した日々がここにあったなということを取り戻せるいい場所だなと思って、ずっとあってくれて嬉しいと思っています。

一方、仙台の家の近くに、宮城県立美術館という前川國男の最晩年の美術館がありまして、数年前、それが取り壊されるという報道がされて、県民たちはもう青天の霹靂のようなその報道にびっくりしてしまいました。すごくいい建物で、前川の作品だとは知らないときからお散歩して何だか居心地がよく、ここで子供たちものんびり遊んでるしゆっくりしたいなと思える。そんな建物がなくなってしまうことを肌身に感じたときに、そう思った人たちがたくさんいて、保存しようという活動が起こり、私も関わって署名だとか、県のいろんなところに出かけて、どんなにいい建物か、残す意義を広めていく活動をしたところ、奇跡的に残ったんですね。残ったのに、前川建築のツーリズムネットワークに入っていないのがちょっと悔しいんですけども。それで市民と行政の関わり合いということで一市民ながら、私は生き残らせる活動をしました。

今、気になっているのは、浦和の地元では原山市民プールも、数日前に浦和駅の東口で保存運動の署名があって、思わず駆け寄って署名してしまったんですけども。子供が小さいときに学童でみんなで行ったり、家族でも行ったり、のんびり市民プールで遊んで帰って昼寝するという夏の懐かしい思い出は、プールがあったから私達家族の中とか地元の人にあるわけで、やっぱり住民がこれだと思ったら地道に活動して、自分たちの生きてきた記憶なのだからということ、もう少し行政にも聞く耳を持って欲しいなということをお話ししたくて、ちょっとお時間をいただきました。ありがとうございました。

橋本：これからもずっと建物がある限り、何らかの記録と行動と、それから発見していくという、先ほど渡邊さんがおっしゃった、長く使われていてこそ価値がある、そして価値をさらに生むというようなこと、皆さんの代から子供の世代、さらに次の世代に、今日のような会が延々と続いていくことが、やはり建物をみんなに残していく、「わたしたちの建物、建築」ということになっていく大きな原動力だと思いますので、今後とも、セミナーを含めて埼玉会館をよろしくお願いします。

小澤：ありがとうございます。

本日は、本当にいろんな方々が来てくださいました。埼玉会館がオープンした当初に職員でいらした方、すごく関わりの長い方、改めましてご来場いただいた皆様に感謝申し上げます。建築セミナーをこれからも継続して、皆様とまた議論の場というのも深めてまいれたらと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

最後になりましたけれども、本日の建築セミナーを開催するに当たりまして岡山県の関係者皆様とDOCOMOMO Japanの関係者の皆様にも改めてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

***本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。**